
Viola mandshurica

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Viola mandshurica

【Nコード】

N9272H

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

あれから私はどう生きていくか迷ってた。それを判ってくれる筈の君が遠くに行った。あれは私が悪いの？

講師 1

董の香りがする。
よく聖が言った。

それから私はこの香りが苦手になった。

……だって董は誘う香りだと。

私の意思には関係なしに董は香る。

それからずっと。

聖は私を抱こうと舌なめずりをして待っている。

…怖い。

本気だった。

本気で私を求めている。

それが判るから怖い。

あれから皇帝は魔力を無くし。

アスカともどもどこかに姿を隠し。

あれ以来黒魔法が暴走することも無くなって。

本部が解散したものだから駐屯地自体も意味をなさなくなって。

私は魔法だけが取り柄だったからこれから何をして生きていけばいいのかわらなくて。

そんなとき聖が言ったんだ。

「俺のところに来たら良い。」って。

でも私は観念はしたけど。

このままずるずる聖の世話にはなりたくなかった。だってそれは目に見えてる。

聖は私を捕まえて離さないこと。

私だって自分で生きていけるのなら生きていきたい。

それがプライドってもんだ。

いくら私が女みたいな容姿でも立派な男で。

聖より年上で。

一時は生徒と講師の関係だったんだから。

「いや。聖。私はアパートを探す。」

だから軽く言ってみただ。

試すつもりも侮るつもりもなかった。

むしろ私は聖を好きなんだ。

だけど。だけどね。

世の中好きだけじゃ渡れないこと私知ってるんだ。

魔法しか取り柄のない私にはなれる職業も限られて。

誰にも影響の与えない魔法でグリーンを育てるとか？

それか人に影響を与えない白魔法を教える講師か。

それぐらいしか無かったから。

だけど私にはそれが必要だった。

だって私にはアスカのほかに身内もないけど。

聖には友達だって元の彼女だってきつと両親だっているはずで。

きつと私なんかにつくってる暇はなくなるから。

「…私は聖に時々会えれば良いよ。」
「
そう言ったら聖は眉根を上げて怒ったんだ。」

講師 2

「時々ってどういうことだよ？」

お前約束破ったくせにまたこの間のも破るつもりか？」

「いや。そういう意味じゃなくて。」

そうじゃなくて。」

聖は凄く怒って。

怒った理由は判らなくはないんだけど。

「エレノア。俺がどれだけ耐えてるか判ってるのか？」

ホントならもうお前は俺のものになってるはずなんだけど？」

「ごめん。判ってる。」

わかってるんだけど。」

「判ってないだろ？」

判ってたら時々会えれば良いだなんて言わないはずだ。」

私は震えあがって。

飢えた獣のような瞳をした聖が怖くて。

身を固くしかできなかった。

怖くて縮み込んだ。

だけと言わなきゃならないことは言わないといけなくて。

「だけと現実問題。」

聖には家族だって友達だって育った場所に戻ればいるだろう？

私にだって育った場所がある。

お前が育った場所は見てみたいけど私だって地元に戻らなきゃ。

お前が大切に思ってる場所があるように私にだってあるんだ。

それを捨てるとお前は言うのか？」

「問題をすり替えるな。ただ嫌になっただけなんだろう？俺がお前を狙うからお前は息もつけなくて。」

お前は結局俺が言ってることこれっぽっちだって信じてないんだろ？」

董の香りが怖かった。

自分が男を誘う香りをさせてることが嫌だった。

「違うんだ。聖。」

私はっ！！！！」

キスされた。

深く強く。

唇から伝わってくる聖の熱は。

私を好きだと伝えてきた。

「違う。」

そう繰り返す。

だって私は聖を愛してるから。

愛してるから心のまま生きるのは無理だと伝えたかった。

「愛してるから一緒に居られないんだ。」

心のまま生きるときっと私はダメになってしまっから。

聖に依存しないと生きていけなくなってしまっから。

「お願いだ。聞いてくれ。」

私自立しないとダメになっちゃうんだ。」

キスは続く。

合間に私は伝えるだけ伝えたんだ。

チツと舌打ちをして。

聖は私を離れた。

「じゃあ。アパート見つけたら連絡するんだ。

俺だって地元に戻って多分魔法関係の仕事をする。

そして決心が固まったら全部引き揚げて俺の元に来るんだ。」

そして。

私を見ずに部屋を出て行ってしまった。

私は取り残されて。

でも後悔はなかった。

愛してるから禁忌は聖に犯させないから。

私は誓ったんだ。

ホントは皇帝に殺されてたはずの命。

聖に救われて息を吹き返したから。

尚更あいつの邪魔になっではいけない。

そう強く思ったんだ。

きつと聖も地元に戻ったら。

私のことなんか忘れてくれるだろう。

綺麗な子も素敵な子も優しい子も美人も。

きつと聖には選り取り見取りに違いないから。

私は地元に戻って。

きつと白魔法の講師をやる。

だけど。

きつといつか。

聖を思い出しても心が痛まないぐらい強くなってから再会したい。

だから今は手を離す。

バイバイ。

君が私の愛したただ1人の人間なんだ。

講師 3

私がアパートを借りたところは、
地元でも何でもなく。

ただ私が好きな湖が見える場所に建ってるってだけで、
だけど何だか湖を見てると落ち着くんだ。昔から。

私とアスカの親はカードマジシャンだったって聞く。
ド派手な生活が好きだった私とアスカの両親はカードマジシャン同
士結婚せずに私たちを生んで。
そのうちどこかへ雲隠れした。

そんな当たり前の世の中だけど。
アスカはそんな親譲りの大らかさで楽しく生きてたけど。
私は反対でそんな生き方はしないように。
ただ操を守り好きな人も作らずひっそりと暮らしていくんだと思っ
ていて。

だから私にとって人生のどんでん返しは聖が現れたことだった。
本当は好きなものは好きというアスカがうらやましくて。
でも口に出して言ったこともなければ。
態度で示したこともなく。

だけど世の中は私にも結構公平で。
私は何もできないくせにアスカより魔法が使えるからって講師にな
って。
名前はとどろくようになった。

だからアスカは私を気に入らなくて。
ホント当たり前なんだけど妬ましくて。

私不幸になるためなら何だってするぐらい墜ちてしまった。

その代償がああ皇帝だ。

あれはアスカの弱さと私の欺瞞に代償で生まれた。

憎悪は形を成すと計り知れない。

人間のうちで憎悪ほど人間らしい感情はないと私は思う。

エレノア・エアデール。

私の名前でもあって講師の総称にも今ではなっていた。

でも実際の私は小さくて。

何も無くて。

あるのは聖だけを愛する心。

「ホントに私って情けない。」

言葉に出すと泣けてきた。

「先生。時間だよ。」

コツコツとドアをたたく音がする。

私は結局自分にはこれしか無くて。

白魔法を教える講師になっただ。

私が希望したのは出来れば小さい女の子に白魔法を教えたいということだった。

それは別に幼児が好きだからじゃなくて。

小さい女の子なら私でも手に負えるかなって思って。

実際もうこりこりだったんだ。

大人は男も女もこりこりだった。

こんなん言ったらきつと聖に怒られるかもしれないけど。出会いを後悔してるんじゃないけど。

私にはいい人間関係は築けないから。

それに気づいたんだ。

だから希望を出したんだ。

小さい女の子ならきつと可愛くて。

自分は恋愛対象にならないから。

もうドロドロした思いはたくさんだった。

なのに。目の前にはきつと年は聖ぐらいの男が立ってる。

「先生！！早く。」

そう声をかけてくる。

「…何で…。」

私は力なくガツクリ呟いた。

聖とは違って私の事を「先生」と呼ぶけど。

「何でつて事務の人がここに行けつて言ったから。」
その男はそう言つてニカツと笑つた。
太陽のような笑顔で私には眩しくて。

私は部屋で待つとくようにその男に言つて。
事務へ直行したんだ。

「…あいつ何なんですか？」

私はちゃんと小さい女の子希望つて書いたんですけど？」
事務の奴は私の履歴を調べて。

「あなた。魔力が高いから成人男性向きなんですよ。」
そう言われさらにガツクリきた。

「…代わつてもらつて言つのは…。」
私がそう続けようとすると。

「ああ。無理ですよ。定員いっぱいだから。」
先に遮られ逃げ道を塞がれた。

「…そう…ですか。」
私はエライことになつてしまったと1人ごちる。
1人立ちしたいからまた講師になつたのに。
此処で辞めるわけにもいかず。

私には選ぶ権利はなかつた。

そしてガツクリきながら部屋に戻ると太陽のような男が私を出迎えた。

「先生！どこ行つてたんですか？」

「ああ。ちよつと事務に用があつて。」

「先生。初めまして。

俺曰下聖也と言います。

これから半年よろしくお願いします。」

「…エレノア・エアデールです。

こちらこそよろしく。」

聖との出会いも確かこんなんで。

あいつは初めから「エレノア」と呼び捨てだったけど。

あいつは初めから私を追いかけまわしてたけど。

ああ。思い出すとちょっとゾツとする。

今度はそんなことがありませんように。と祈る。

「ねえ？先生？

俺は先生の事何て呼べばいい？」

自己紹介が終わった途端目の前の太陽みたいな男は、いきなりタメ口になり。

「エレノアって呼び捨てでいい？」

そう聞いてきた。

「…先生でいいんだけど？」

いちいち名前を呼ばなくていい。」

極力感情を込めないように言ったら。

目の前の男が。

「何で？これから親しくなるのに「先生」じゃつまらないじゃん？

俺の事は曰下でも聖也でも何でもいいよ。」

「つまらないとかそんな問題じゃないと思うんだけど？」

私は幾分か脱力しながら。

そう呟いてるのに。

当の本人は聞いてなくて。

「先生は今日からエレノアって呼ぶから返事してね。」
ほぼ強制だった。

そして強引に私の手を取り握手をしてきたんだ。

「よろしく!!エレノア。」

…私は押しの強さに充てられた感じがして。
ちよっと気が遠くなった。(涙)

チビ 1

私にすぐ手を外すと。

日下はそれを許さず。

「エレノア。董の香りがするってみんなが言ってたから俺楽しみにしてたんだ。」

にっこり笑って。

私を引き寄せる。

「だ〜っ！お前は何で抱きつく必要がある!!!

は〜な〜せ〜っ〜っ (涙)。」

「良いじゃん。減るもんじゃなし。」

ああ。どっかで聞いた。その台詞。

私は若干気が遠くなりながら懸命に暴れた。

「特に首筋から香りがするって。」

「やめろって!!!!!!」

私は思わずげんこつで日下を殴ったんだ。

「いってえ〜。なぐることないだろ?」

日下は思わず私を離して頭を抱える。

「ああ。星が飛んだ。」

頭をさすりながら言うんだ。

「全くエレノアは凶暴なんだから。」

誰かに言われたこと無い?」

「ふん。自業自得だろう？」

大体白魔法教えるだけで何だってお前は香りが気になるんだ？
関係ないだろ？

しかも別に一緒にいなくていい規則なんだから別に部屋借りるよ。

「

私は最悪の事態を避けたくて。

だからこの湖畔に建ってるアパートを選んだんだ。

ここに住めば講師をしても生徒と同じ部屋にいないって。
そういう条件だったから。

なのに。

日下は言ったんだ。

「俺奨学生だから一緒に住まわせてね。」

…マジですか。(涙)

「日下。お前ホントに？」

「だって俺奨学金もらったからここに居れるんだよ？
半年したら返していかなきゃならないから部屋代払う余裕無いんだ。
だ。」

うち一番下のチビがまだ4歳で。

親は働いてるけど金になんないんだよね。

せめて俺がヒーリングぐらい使えるようになって白療養士になれたら少しはって思ってたけど？」

医者ほど稼ぎがあるわけじゃないけど。

そう呟く日下に私は出て行けとは言えなかった。

「親御さんは何て言ってるんだ？」

「うちの親は片親だから母親だけなんだけど。

講師がエレノアだって聞いて喜んでたよ。

綺麗だしファンだって。

うちの母親もエレノアに白魔法習いたかったって言った。

」

そんなこと聞いたらもう私は否定できなかった。

元々押しに弱い私は日下を受け入れるしか道はなかったんだ。

チビ 2

「で。たまにうちの親が夜勤のときに下のチビだけ連れてきていい？」

日下は私に伺いを立てる。

私は何だかもう考えがまとまらなくて。

「実は外で待たせてるんだけど。

下のチビ。

親が明日迎えに来るからお願い。」

そう言われるともう。

何も言えなくて。頷くしかなかったんだ。

そう言って日下は外に声をかけたんだ。

「ほら。入れ。」

日下に連れられて入ってきたのは。

小さい男の子だった。

入ってきた途端私に抱きついてきた。

「えっ？」

私が驚いて抱き上げると。

「ああ。こいつ。俊弥っていうんだけど。

エレノアの好きみたいで。」

「えっ？」

「ほら。エレノアの董の香り。」

あれが大好きみたいでずっと会いたいって言ってたんだ。」

日下は若干済まなそうにそう言った。

私は幾分か不満だったけど俊弥に罪はないし。

可愛かったから。

俊弥は小さい手でギュツと私の首に手を回す。
私は愛しくて。

俊弥を抱きしめた。

「っ！！！！ひゃっ！！！！！！」

だけどガキだからか。

それとも故意にか。

故意だったらものすごく恐ろしいけど。

私が弱い首筋を舐めてきたんだ。

「こらっ！！！！舐めるんじゃない！！！！」

私は思わず俊弥を落としそうになって。

寸でのところで日下に渡したんだ。

「だつて〜エレノアの首美味しいんだもん。」

日下に抱かれた俊弥はそう言っつて。

また私にだっこ〜と寄ってくる。

私は首のボタンをとめてからまた俊弥を抱き上げると。
俊弥はぐずりだしたんだ。

それで力任せにボタンを引っ張るからボタンが飛んで。

また舐めてくる。それもおいしそうに。

私はくすぐりたいのを我慢しないといけなくなり。

その様子を日下は見て。

「エレノアってば母親みたいじゃん？」

と寒いことを言うんだ。

「ちよっ！！笑ってないで何とかしろって！！！！」
私は息も絶え絶えで。

日下に俊弥を渡そうとしたら日下は私ごと抱きしめてきて。

日下も私の首筋を舐めてきた。

「ひゃあああああああ。」

私は堪らず大声を出して。

俊弥は落としそうになるし。

日下は抱きついてくるし。

息もつけなくて。

「く~~~~さ~~~~か~~~~」(怒)

いいかげんにしろ！！！！」

またげんこつを繰り返したんだ。

「いってえ~~~~」

日下は堪らず私から離れて。

その間も俊弥は私の首を舐めてるから襟周りも唾液でぐちゃぐちゃで。

でも俊弥は満足そうに笑うんだ。

「えれのあつていいにおいがするvvv」

その日はずっと俊弥に私は首を舐められたままいるしかなかった。でも当たり前だけど性的な意味は何もなかったからそのままにしておいたんだ。

それが間違이었다と気付くのはもう少ししてからで。

「えれのあ~~~~しゃわーいっしょにあびよう~~~~」
「えっ？」

私が首周りが俊弥の唾液でぐちゃぐちゃなものだから。
服替えようか。シャワーでも浴びようか。
そう思ってるときで。

一瞬心を読まれたのかと思ったんだけど。
そうではなくて。
ただせがんでくる。

「…日下。何とかしろ。」（怒）
私がそう言うと言下までもが。

「俺もエレノアとシャワー浴びたい~~~~VVV」
って抜かしやがった。（怒）

何だか聖の方がマシな気がして。
何だかすごく疲れてしまった。

「えれのあ~~~~しゃわー。」
俊弥は無邪気なんだけど何だか私には嫌な感じがして。
視線を俊弥に合わせて言ったんだ。

「兄ちゃんと入って来い。
狭いから3人は無理だから私は遠慮するから。」
そう言うよ。

俊弥は不服そうな表情をして。

私に抱きついた。

「な？俊弥。」

私がそう言つと。

「いやだ。えれのあとがいい。」

そう言つて私の顔に手を添えてきたんだ。

私は一瞬不意を突かれ。

「じゃあちゅーしてくれたらそうする。」

俊弥の一方的な妥協案で。

キスされた。

がびーーん

私は一瞬何が起きたか判らずされたままになっていて固まった。

「おお。俊弥。」

えらい熱烈なちゅーだな。」

つて日下は笑つてる。

「く~~~~さ~~~~か~~~~(怒)」

俊弥に怒るわけにもいかず私は日下に怒りの矛先を向けた。

「いや。だって俊弥はエレノアが大好きだって言つてて。」

お前がシャワー拒否つたからこいつにしては頭を使って妥協案出したんだろっ?」

日下はそう言つて。

近づいてきた。

「えれのあ~~~~もういつかいちゅーさせてv v v」

私はもう視線を合わせる気にもならず。

俊弥の頭を撫でたんだ。

「でもエレノアって俊弥には甘いよな。

俺がそんなんしようとしたらげんこつはするは張り倒すはだろ？」

「当たり前だろうが！！！」

日下は足もとの俊弥を抱き上げて。

「エレノアはまたシャワーちゃんと浴びれたらちゅーしてくれらるって。」

そんなバカなことを俊弥に吹き込みながらシャワー室に消えて行ったんだ。

私は1人になって。

何かどつと疲れが出て。

… 大事なことに気づいたんだ。

私は聖に連絡を入れるのを忘れてたということ。

あああああ。

ヤバい。ヤバすぎる。

聖は怒ったら手がつけられないんだよな。 (涙)

しかも1人部屋借りるって言ってたのにこのままじゃきつと…。

あああああ。考えるだけで恐ろしい。 (涙)

その時連絡も入れてないのにドアの外から聖の声がしたんだ。

「エレノア！！！」

万事休すか。

チビ 4

部屋の外には聖がきつと瞬間移動で来たんだと思う。
何の前触れもなかったから。

ドアを開けるといきなり強い口づけを受けた。
息も絶え絶えになりながら。
私は誤解を招かないように聖を見上げて。

「聖は私を信じてくれてるよな？」
そう確認してみた。

聖は部屋の中が気になったみたいで私を押しつけて入ろうとしたから。
ら。

「あのっ今日から生徒と一緒に住まないといけなくなっ…」
私は震える声を懸命に出したんだ。

「エレノア。1人で住むっていつから俺は許可したんだけど？」
チツと舌打ちが聞こえて。

私は聖に掴まれて。
また噛みつくようなキスを受けて。
キスの合間に私は。

「だから。ちょっと事情がある…みたいで。」
言葉を紡ぐひまもないぐらいキスは続く。

「これはどうした？」

聖は何かに気づいたみたいで私に問う。

「えっ？」

「それは何なんだ？」

聖が指す先は私の首周辺で。

「何か濡れてるし。何をしたんだ？」

「いや。あの。」

これは。」

私は情けなくしどろもどろになってしまって。
悪いことは何もしてないけど。

「あの。聖。」

これは…。」

説明をしようとしたとき。

半裸の俊弥が「えれのあ〜」と現れたんだ。

聖の顔がみるみるひきつり。

私を無言で責める。

私は何も悪いことしてないのに（涙）

「えれのあ〜だった〜」

俊弥は無邪気で。

うるさくせがむから私は仕方なしに抱きあげて。

「聖。これには理由があつて頼むから怒らないで聞いて。

お願いします。」

「えれのあのにおいしいにおいvvv」

私の首に俊弥は顔を近づけて。

そう言つてまたペロペロ舐め出す。

好きな人ほど怖いつてよく言ったもんで。

私には聖が1番怖くて。
その俊弥を見た聖はみるみるまた怖い顔になった。

「おいこらガキ。」

エレノアは俺のなんだぞ？」

聖は怒りを抑えながら妙な笑いを浮かべて俊弥に言ったんだ。

「なんなの？にいちやん。」

えれのあはぼくのなんだから。

だってさっきおとなしくしゃわーあびてきたらちゅーしてくれ
ってやくそくしてくれまし。」

ああああああ。万事休す。

私は笑って済ますしかなかった。

こわい。怖すぎる。

聖は本気になって。

「エレノア。」

私の名前を呼んで。

「は…はい。」

私は観念した。

「お前。こいつと不倫してんのか？」

「なっ！！誤解だしそもそも不倫ってなんだよ！！！！」

「じゃあちゅーしてやるって約束したのか？」

「やくそくしたもん」

俊弥が横から言葉をはさみ。

私を無理やり自分の方を向かせて。

油断してた私が悪いんだけど。

俊弥にまたキスされた。

「なっ！！！」

その現場を見て聖は怒ったんだ。

「エレノア！！！！！！お前隙があり過ぎ！！！！」

そこへ運悪く日下がシャワー室から現れてさらに話はややこしくな
ったんだ。

「お前。誰だ？」

「にいちゃん」

「日下。」

一難去つてまた一難。

もう待たない 1

「エレノア。この人は誰？」
不穏な空気の中言葉を発したのは日下だった。

「あつと。この人は私が付き合ってる人で聖アキヤさん。
もと私の教え子になるんだ。」
聖は機嫌がものすごく悪くて。
チラツともこつちを見ない。

「聖。こつちは今日から私の教え子になる日下聖也さん。
それで今日は仕方なく預かっている日下の弟の俊弥君。」
日下は二カツと例の太陽のような笑いを浮かべて。

「ふ〜ん。エレノアって付き合ってる人いたんだ。
残念。俺狙ってたのに。」
その言葉で聖が口を開いた。

「エレノア。お前誰彼誘うなよ？
みんな本気にするぞ。」
「だから誘ってないって！！！」
「お前心配なんだよな。押しに弱いし情に熱いし。
何せこんなチビに襲われてるぐらいだし。」

嫌味を言う聖は怒ってる証拠だった。
俊弥は相変わらず足元でだっこ〜〜と言ってるから。
私が抱き上げようとすると。

聖がそれを阻んだ。

「お前！！チビだからってエレノアに懐くんじゃない！！」
そう言ったら俊弥は泣きだした。

私は仕方なく俊弥を抱き上げて。
ゆらゆら抱いていたんだ。

「えれのあゝゝだいすきvvv」
つい今しがたまで泣いてた俊弥は泣きやんで。
上機嫌になった。

そんな様子に日下は。

「エレノアってば人気もんだな。」
そう言った。

聖はそれが気に食わなくて。
私を無理やり自分の方を向かせて言ったんだ。

「俺もう待たないから。」
聖は本気で。

私の腕から俊弥をおろし瞬間移動を唱えたんだ。

もう待たない 2(Akiya ver.)

俺は腹立たしさに紛れエレノアを自分の部屋に瞬間移動で連れてきてしまった。

だってエレノアは無意識に俺を煽るし。

何だってあんなことになったか知らないけどあんなチビにちゅーを許して。

俺なんか普通にキスできるようになるのになんかかかったのに。

あんなチビのくせに会ったその日にちゅーさせるなんてどうかしてる。

それにエレノアだって隙があり過ぎで。

見てたら危なっかしくて。

早く自分のものにしてしまいたい思いに駆られた。

エレノアは俺を見上げて。

「聖？怒ってる？」

そう聞くんだ。

「…怒ってるよ。」

俺がそう答えると。

「ごめん。説明できなくて。」

素直にそう言ったんだ。

その時だった。

「アキヤ〜ちょっと入るよ。」

女の声にエレノアが構えたのが判り。

俺はため息をついて。

「あの声。俺の姉の声だから。」

誤解しないようにと言つと。

エレノアは俺を見て。

「今度ゆっくり話すから悪いんだけど帰って良い？」

そう言つた。

俺はぐったり何だかしちゃつて。

姉に何か聞かれるのもしゃくだつたから頷いたんだ。

エレノアは「ありがとう」

そう言つて瞬間移動をして消えたんだ。

「ちよつとアキヤ。

今誰かいたでしょ？」

姉はうるさい。

もう待たないって決めたのにエレノアに弱い俺は。

エレノアが悲しい顔をするだけで手を出せない。

情けない。

「もう。姉ちゃんがうるさいから考え事すら出来やしない。」

姉は昔からうるさくて。

思えば少しアスカと似てるかも知れない。

うつすら俺は思つたんだ。

炎 1

私が瞬間移動を唱えて。

自分の部屋に戻ると湖畔が見える窓辺に日下が俊弥を抱いて立っ
いて。

私は声をかけたんだ。

「…寝たのか？」

日下はびっくりして振り向いた。

「…エレノア。いつ帰ってきたんだ？」

「ああ。瞬間移動できるからいつでも帰ってこれるんだけど。」

日下は泣き疲れて眠ったと見える俊弥を私に見せて。

「エレノアはどこに行ったってうるさくてたまらなかった」と苦笑
いした。

そして私に寄って来て。

俊弥を寝かせながら日下は言った。

「でも驚いた。」

あれがエレノアの付き合ってるやつか。」

私が日下を見上げると。

「ああ。すっかり乾いちゃったな。」

チビが舐めた首周り。」

私の首元を眺めて。

「今日は悪かった。」

チビの奴こんなにエレノアを好きって知らなかったから。

こいつもつと年食ったらえらいタラシになりそうでセクハラまが

いの事して。

ホントごめんな。」

私が。

「寝顔は天使なのにな。」

そう眩くと日下は目を細めて。

「そっだな。」

そう言った。

「ところで魔法教えてくれない？

何でもいいから1番簡単なやつ。」

日下はそう言っつて。

私は疲れ切っていたけど。

手の上で炎を作っつてやった。

「わ〜〜。凄いじゃん。エレノア。」

「…当たり前だろう？」

一応私は講師なんだから。」

「俺がそれ出来るようになるのはどれぐらいかかる？」

「…平均で1ヶ月ぐらいじゃないか？」

「俺。頑張るから見捨てないで。

チビも明日には親に帰すし。

当分チビはほかに預かっつてもらっつことにするから。

だっつてエレノアにセクハラしまっつて俺にエレノアは構っつてくれないから。」

「そっか？」

私はそう答えて。
シャワーを浴びに行ったんだ。

炎 2

「ところでおまえはどこで寝るんだ？」

シャワーを浴び終わって私はいつも通り肌の見えない服を着て。

日下の前に現れると。

日下は窓辺に立って月明かりを見ていた。

「ん？ああ。」

エレノアの邪魔にならないところならどこでも良いよ。」

そう言った。

「ってか布団もないんだけど？」

だって私は1人のつもりで此処を用意したから。当たり前だけど。」

「少し寒いだろうし。俊弥も風邪ひくかも。」

足元で眠るチビは可愛かった。

私は意を決して。

「いいや。判った。」

お前と俊弥でベッド使え。

兄弟だから大丈夫だろ？」

「…でもエレノアは？」

「私はどうにでもなるし。」

なんならどこかへ行っても良い。」

そう言えばこの会話は聖ともしたな。

初めて聖が講習に来た日。

あの時はベッドに引きずり込まれたけど抜け出して。結局眠れなくて。

私は夜通し起きてた気がする。

眠る聖は穏やかで案外安心したんだった。
そう思いだす。

「ごめん。エレノア。

布団すら持つてくる余裕無くて。

エレノアが講師じゃなかったら俺きつとこの講習受けられてないから。

普通は放り出されて終わりだ。

コブつきだし。」

そう言つて足元で眠るチビを抱き上げた。

「…良いから早く寝ろよ。」

明日は早く起きて今日の分も取り返すから。」

「でもエレノア。」

「…良いから。」

その時だった。

チビが目を覚まして。

「えれのあ~~~~~vvvvv」

そう言つて私に抱きついてきた。

私は思わずチビを抱きかかえた。

そしてその勢いで後方にあつたベッドに倒れたんだ。

チビのくせに押し倒された感がぬぐえなくて。

でも日下は笑った。

「こいつ。ホントにエレノアが好きなんだな。」

俺の腕からダイブしてエレノア押し倒すなんてすごいじゃん。」

チビは押し倒した私をニツと笑ってみて。
茫然としてる私の首周りにまた顔を埋めたんだ。

「ひゃっ！！！！！」

私は情けない声を出して。

くすぐったくて。

そしてチビの寝息が聞こえ始めたんだ。

あはははと日下は腹を抱えて笑い。

そして。

ベッドへ寄ってきたんだ。

「エレノア。今日だけ勘弁な？」

そう言っつてベッドに潜り込んでくる。

どうしても大人2人+チビだとシングルはきつすぎて。

どうしても私はチビに押し掛かれてるは日下に抱きしめられてる
はで苦しくて。

でも身動きできなくて。

身をよじるとまたチビが起きそつで。

悪循環だった。

日下の手は意地悪で。

私が抵抗できないのをいいことに触りまくって来て。

「ほっそい腰〜」。

俺の両手でつかめるかも。」

などと不埒な言葉をほざくから。

私は眠れなかった。
ただジツと日下が眠るまで耐えてたんだ。

「エレノアってホント董の香りがするよな〜。」
そして私の髪に顔を埋めて香りを嗅いでるらしい。

「でも俺。男色じゃないから。
安心して。」

日下はそう言う割にベタベタ人の事触りまくってくる。

「ああ。もう（怒）

早く寝ろ！！！！！！」

私は耐えきれず怒鳴ったんだ。

「もう観念したから。

今日だけは仕方ないと思ってるから。

だから早く寝ろ！！！！」

「はい。」

日下はそう言っで。

私の腰を引き寄せた。

「俺抱き枕がないと眠れないからこうしてて良い？」

「なっ！！！！」

「…変なことしないから良い？」

そう言う日下の瞳に私は弱くて。

仕方なしに頷いた。

私はこの日は首周りはチビに押し掛かれ。

腰には日下の太い腕が回り。

何とも滑稽で寝苦しい夜を過ごしたんだ。

炎 3

唇に濡れた感触がして。
目が覚めた。

目の前にはチビの顔。

「えれのあ~~~~vvv」

おはようのちゅ~~~~vvv」

チビの顔が大きくなってまたキスされた。

チビのくせに口がでかいから私の口は完全にふさがれ。

私は窒息寸前。

力を加減してチビをたたく。

そしたらまたチビは泣きだして。

私に押し掛かってくる。

顔をグイと上へ向けられて。

「えれのあ~~~~vvv」

泣きながらまた口を塞がれる。

もちろん子供がするキスなんだけど何だか私には嫌な感じがぬぐえなくて。

両手でチビの顔を私から放し。

「おいこら俊弥。

兄ちゃんはどこへ行った？」

そう聞いたんだ。

「にいちゃんは~~~~たぶんそと~~~~。」

私起き上がるとまたチビが「だつ~~~~」と来た。

私は仕方なしに抱きあげて外を見ると。

たばこを吸ってる日下の姿が見えた。

「おい。こちら。日下。」

コレ何とかしろ。」

私が顔を出してそう言つと。

日下は振り向いて。

「ああ。エレノア。」

おはよう。」

そう言つた。

「…おはよう。」

って何でも良いからチビをどうにかしてくれ（涙）

付きまとわれて着替えすら出来ない。」

私がそう言つとチビが。

「えれのあのきがえみたい〜〜〜vvvv」

そう言つたもんで私も日下も固まつた。

「…おい。私は男だぞ？」

チビは私の腕の中でキャツキャツと笑い。

私が事実を述べてるのに聞いてない。

「…日下。何でもいからこいつどうにかしろ（怒）」

チビを日下に渡そうとしても。

チビは私にしがみついて離れなかった。

「い〜〜や〜〜だ〜〜〜」。

えれのあのきがえみるんだ〜〜〜」

何なんだ。こいつは。
私は離れないチビに辟易してしまった。

日下は笑っていた。
大人ならバカなこと言つたと怒って。
無視して。

それでいいのにガキだからどうしていいか判らなくて。

「…おい。日下。」

何だつて私はこんなセクハラまがいの事に遭わないといけないんだ？（怒）

日下に助けを求める。

日下は私から無理やりチビをひきはがして言った。

「ごめんな。」

こいつにはよく言って聞かせるから。」

日下にひきはがされたチビは盛大に泣き始めて。
少し心は痛んだけど。

私はあえてそれを無視して。

着替えを持ってシャワー室に入ったんだ。

限定白魔法 1

シャワー室から出て例の聖には評判の悪い服しか持ってないから。それを着て。

部屋に戻ると話し声が聞こえた。

「だからエレノアは今日から忙しいの。」

お前の相手してる暇はないの。」

「でもぼくは……えれのあをおよめさんにするんだ……」

そこで日下が吹き出し。

「あはははは。お前エレノア嫁さんにするの?」

「にいちゃん。なにがおかしいんだよ。」

ぼくはほんきだ。」

「っていうかお前。」

エレノアは兄ちゃんと一緒に男なんだぞ?

男は嫁さんにはなれないって。」

「なれるの!!!えれのあはぼくのものだ。」

…エンドレスな会話を聞いてて何だか気が遠くなって。

ちよつとふらふらしながら部屋に現れてみた私に。

開口一番チビが言った言葉は。

「あつ!!!えれのあ!!!」

ぼくのおよめさんになつてくれる……?」

私は何だか眩暈を覚えて。

「…湯あたりしたみたいだ。」

そう呟き日下をにらむ。

日下はホールドアップの姿勢で。
お手上げだとジェスチャーをした。

「仕方ないな。」

私は言つて。

魔法を唱えた。

その魔法は。

ガキ・不埒な奴限定で効く私に触るとパチツと嫌な静電気みたいな
ものが発せられるような魔法だった。

もちろんそれは自分にかけてからチビ自体には何も影響はないわけ
で。

大体ガキは嫌な思いをすれば自分から離れていくもので。

口で言つても無駄ならそれぐらいしないと私も精魂尽き果てる。

私が聖にそれをしなかったのは聖は何でか効かなかったんだ。
まれに年下のくせに私の魔法が効かない奴もいて。
そんな奴には仕方なくその度に叩くとか。
そういうふうにするしかない。

「えれのあゝゝゝvvv」

チビが寄つて来て。

私に触ろうとして。

パチツと来るかと思つたら。

チビは私の魔法が効かない奴で。
意味がなかったみたいで。

私の足元からよじ登ってこようとするから。

私は半ば呆れて。

日下に言ったんだ。

「くら。日下。」

「今日もこのザマなら私はお前の講師下りるぞ。」

そう言ったら流石に日下も。

「ええええ。それはマジ止めて。」

焦ってそう言うから。

「早く連れて行け!!!」

チビを見ずに私は言ったんだ。

「チビは相変わらず」「だっこ〜」だの。

「ちゅ〜」だの言ってるけど。

私の足元からチビを抱き上げ日下は部屋を出て行ったんだ。

私はやっと1人になれて。

やっと魔法書を見る気になったんだ。

限定白魔法 2

そういえば魔法書を開くのは皇帝がいたころ以来だななんて思う。

世の中が平和になればなるほど本当は魔法なんか要らないのかもしれない。

だって魔法で仮に人を思い通りにできたとしても。

神さまじゃないから生まれてくる子供の性別すら変えることはできないし。

運命を変えようたつて無理な話で。

思う通りに生きられたと思っただとしても。

それは一時的なもの以外何でもないから。

白魔法がいくら人に悪影響を及ぼさないにしても。

少しは自粛しないとかなんて思う。

ヒーリングで傷は治せても相変わらず手術は必要だし。

それに耐えるには体力以外ないし。

白魔法はあくまで治癒を助ける働きをするだけで。

根本は切除するとか。

それ以外は昔と変わらず助かる道もない。

それは何だか人間の限界を示してるようにも思えた。

「エレノア。」

振り向くと出て行ったはずの目下が戻って来ていて。
腕にはチビを抱えていて。

「どうした？」

私が聞くと。

「…母親が迎えに来ないんだ。」
そう言った。

「どういうことだ？」

私が問うと。

「だから。来ないんだよ。」

家に連絡しても出なくて。」

「落ち着け。日下はほかに兄弟は？」

「こいつ1人なんだよ。」

俊弥1人。うちホントは3人兄弟だったんだけど。

兄貴が居ただけどバイク事故で逝ってしまった。

うちの母親約束は守るから何かあったんじゃないかと思って。」

流石にチビも私と日下の雰囲気は只ならぬと感じたのか大人しくしていて。

「他にお母さんが行きそうなところは？」

「全部当たったよ。」

連絡も何も受けてないって。」

「日下…。探してみよう。」

お母さん。きつと少し遅れてるだけだって。」

私がそう言つと。

きつと頷くと思つた。

素直に頷くと思つた。

「だって兄貴のときだってそうだったんだ。
連絡が取れなくなつて急に。」

次に会えたのはもう亡くなったって連絡で。
でも日下は悲痛な声で私に言ったんだ。」

「日下。お前がすっかりしなくてどうする？」

チビは何もできないんだぞ？

お前が頼りなんだぞ？」

私はそう言って。

上着を着て。

「ほら。探すぞ。」

そう言って日下とチビを掴み。

瞬間移動をしたんだ。

私が瞬間移動をして着いた先は。
何処かの公園で。

緑が眩しくて。

日下は私の手を放し。
周りを見渡した。

「見覚えあるのか？」

私には瞬間移動の場所を特定する能力は人が関わっていると発揮されない。

自分1人なら制御できるけど人が関わると人の思いが強く反映される。

だから今私が見てる景色に覚えは全くない。

「ここはぼくのうちのきんじょ〜」

足元でチビが言った。

日下が険しい表情で私を見て。

「最悪かも。」

そう確かに言ったんだ。

「何で？」

「だってここ兄貴が最後に立ち寄った公園で事故なんだけど何で事故が起きたかとか。

何でここに立ち寄ったか？とか。

関わった奴の話さえ迷宮入りで。

犯人さえ捕まってるないんだ。」

日下はそう言って。
会った時の太陽みたいな笑顔は影をひそめ。
眉根を寄せて。
辛そうに言うんだ。

私には予感とか予知とか。
そういった能力は何もないけれど。
昨日日下兄弟に会って。
チビにキスされるたび嫌な感じを受けていて。
それが予知なのであれば。
最悪の事態ってことも充分在り得るってことで。

そして。
見つけたんだ。
日下が。
母親が倒れてる姿を。

まだ息があつた母親を見つけ。
日下が私を呼ぶ。
「なんとかしてくれ。」と。

私はヒーリングを精一杯の力でかけるけど予想以上に傷は酷く。
何かに刺されたような鋭利な傷で。
仕方がないから本当はいけないんだけど。
私がエレノア・エアデールだと言われる所以。
ヒーリングの魔力を最大限に引き出すため。
日下に体温を分けてもらう。

それは私が熱を変換して魔力を高めることが出来るから。

手のひらに魔力を集めて傷を癒やしていく。

致命傷でも病気ではなければ私でも治せるんだ。

日下は私の片手を握って。

そこから体温を魔力に変える。

私の意識はそこまで。

魔力の使いすぎは私の命を削るから。

日下に支えられたままでしか覚えてないんだ。

願い 1

「エレノア。エレノア。」

私を呼ぶ声がして。

私が目を開けると。

日下が心配そうに見つめてきた。

「うちの母親助かった。」

やっぱり誰かに刺されたらしい。

でもエレノアのお陰で傷はほぼ治ってチビを連れて帰ったよ。」

「私は倒れたのか？」

「ん。何か魔力の使いすぎ？で。」

エレノアの部屋まで俺も行けなくて。

事務の人に言って休ませてもらったんだ。」

「…お母さん。どんな感じだった？」

副作用とかないか？」

「ああ。髪が伸びたみたい。」

肩までだったのが腰まで伸びてた。」

どうしても白魔法でも魔力のない人間に使つとそれに伴って多少のリスクを伴うから。

強い治る薬を使ったようなもんだから。

「…気分とかは？」

もう大丈夫だって？」

日下は私の枕元で。

またあの太陽みたいな笑顔を見せて。

「大丈夫。エレノアが渾身の力で治してくれたから母親喜んでたよ。今度お礼に来るって。チビ連れて。」

「そっか。良かった。」

私がそう言つと。

日下が口を開いた。

「エレノアはホントに人を救えるの？

不治の病でも？」

「それはどういう？」

「例えば原因不明の病気とか。」

「ああ。それは無理だ。」

私は神さまじゃない。」

「じゃあどういふのなら治せるんだ？」

私は起き上がった。

「何でそんなこと知りたいんだ？」

逆に日下に聞いてみた。

日下は一瞬間を置いて。

「だってそれだったら苦しむ人いなくなるじゃん？」

私は頭を振って。

「違う。違うんだ。日下。」

そう言つた。

私の昔からの疑問だった。

私だって白魔法にだって疑問を持ったこともある。ただむやみやたらに使えばいいってもんじゃない。

だってちよつと高度な魔法使っただけで倒れる始末だから。
いくら命削つても治せない時はあるわけで。
万能じゃない。

私は神さまじゃないから。

「少しの生きようとする力とそれを信じる心がなければお前の母親は死んでたよ。」

私はそれが言いたかった。

生まれつき私はヒーリングが使えるから。

人より少し苦しみが多い。

葛藤が多い。

でもそれでも私は生きようとする人を少しの魔法で補助することは間違いじゃないと思う。

「万能だったら私今頃こんなとこにいないよ。」

そう言ったら。

日下はやつと顔を上げて。

私を見たんだ。

「魔法は怖いよ。」

特にヒーリングは怖い。

命削つて使うから。

それでもお前は望むんだよな？

ちゃんと白療養士になるんだよな？

医者じゃなくてそれを魔法でサポートする立場になるんだよな？」

私が念を押すと。

日下は私を抱きしめてきた。

「ありがとう。エレノア。」

助けてくれて。

俺頑張るから。」

私は日下を見上げて。

新たに願う。

どうかこの男の願いが叶いますようにと。

どうか途中で投げ出しませんようにと。

願い 2

「エレノアってさ。」

部屋へ帰る道すがら日下が言った。

「何だ？」

「たまに凄く男らしいよな。」

「…元々男なんですけど？」

「いやいや。そうじゃなくて。」

「どういう意味だ？」

「いや。だから。」

日下は何故か焦って。

「日頃これだけ色気振り撒いてるのに男だなあって思って。」

「…？意味が判らん。」

「だから。」

今なんか女みたいにふにゃふにゃしてて。

俺なんかきつと間違っつて話。」

「…？だから意味が判るように話せつて。」

「だから。」

ヒールリング使うときだけ男らしいなあつて。」

「…だけつて…。」

私はガツクリきた。

「それは褒めてんのか？それとも貶してるのか？」

「褒めてる…と思う。」

でもこうやって一緒に歩いてるだけで女と間違っつて結構エレノ

アってヤバくない？」

「…ヤバくない？つて。」

ヤバいのはお前の頭じゃないのか？」

「エレノア。それ酷い。」

「酷くない！！お前の方がよっぽど酷い。」

女と間違いそうだけど実は男らしいって立派なセクハラだと思っ
けど？」

部屋に着くと鍵を開けたと同時に私は日下に腕を引かれた。

私は突然起きることに弱い。

今だって頭がついて行かずただ腕を引かれるまま部屋に入って。

引き寄せて言われた。

「悪いけど今日も布団買つて来れなかったから一緒に寝させて。」

「！！！！？お前。昨日だけって言ったじゃん？」

太陽のような微笑みをたたえ。

日下は言うんだ。

「だって今日は大変だったじゃん？」

そう言われると何も言えなかった。

「じゃあ私はどこか外へ…。」

そう言おうとしたら。

「外へ行くのはナシだからな。」

だって今日はエレノアいつも以上に色っぽいから絶対襲われるぞ。

「！！！！？」

「だっていつも以上に今日は隙だらけだし。」

誘ってんだもん。無意識で。」

隙だらけだと聖もよく言ったけど。
でも私はそんな隙なんか作ってる覚えはなかったし。
ましてや会って2日しか経ってない日下に言われるようなことでは
なかった。

「隙だらけってお前いい加減にしっ……!!」
私がそう言いかけたとき。
キスされた。

そして唇が離れ。
言ったんだ。

「ほら。隙だらけ。」
私はゆでダコみたいに多分真っ赤になって。

「私にこんなことするのはお前と聖ぐらいなもんだって……!!」
私は日下の腕から離れる。
ってか離れようとしたのに。
日下の腕の力は予想以上で。

…また引き寄せられた。

願い 3

「あのさ。俺。」

エレノアにはどうせバレるだろうから言っけど。

今日エレノアの魔法の補助してから体がおかしいんだ。」

「えっ？」

私は腕の力を弱めてくれない日下に抵抗してたんだけどそう言われ
て。

日下を見たんだ。」

「エレノアの補助は体温を魔力に変換するってことじゃん？」

「…そうだけど？」

「魔力が燻ぶるってことある？体の中で。」

「…ある…かも？私はないけど。」

日下は太陽のような笑顔で。

「…だから俺何か燻ってるんだよ。」

この状況に似つかわしくない笑顔で。

「今お前にキスしたら少し収まった感じがしたんだ。」

「…何が言いたい？」

私は怖くて。

ちよつと逃げ腰だった。

「だから。抱かせてとは言わないから一緒に寝て？」

キスさせて？

俺が眠れるまで一緒にいて？

せめて責任とって？」

「責任とって…。」

それって私の所為じゃないように思うんだが？」

「だって!!!」

エレノアが悪いんだからな？

色気振り撒いてそうやってるから。」

「いや。だからそれは私の所為じゃ……」

「エレノアの所為だって!!!」

そんな肌の見えない服着て人の欲情煽ってんじゃん？」

「…お前。何考えてるんだ？

肌の見えない服で何を想像してんだ？」

私はゾツとして。

聖は違うゾツと仕方だったけど。

「そりゃ白いうなじとか？」

「っ!!! (怒)」

「いや。だってエレノアが言ったんじゃん？」

「だからって語らなくて良い!!!」

私は目下にげんこつを喰らわせた。

「いってえ~~~~」

「自業自得だろうが!!!」

「ふ~~~~んだ。エレノアつては凶暴なんだから。」

頭をさすりながら目下は私を片手ですごい力で引き寄せたんだ。

「ちよっ!!!」

「あんま俺を煽らないでよ？」

酷くしちゃいたくなるから。」

それは太陽のような笑顔を浮かべる目下に似つかわしくない声で。

…怖かった。

「エレノアに抱きしめてもらって眠るだけできつとこれは収まるから。」

だからお願い聞いて？」

私は恐怖で声が出なかった。

でも必死で頷いたんだ。

つかまれた腕は痛いし。

「…判ったから放して。」

情けないことに震えた声しか出なくて。

私は唇をかんだ。

そして。

逃げたら酷くするからと半ば脅しをかけて。

日下はシャワー室に消えて行ったんだ。

願い 4

だつて怖かった。

足が竦んで情けないことに。

聖にだつてこんな恐怖は感じたことがなかった。

それはきつと。

きつと聖は私を好きだと言ってくれる。

多分愛してくれてるから。

だけど日下は違う。

私を好きなわけじゃないから。

ただ本当に私に煽られたんだらう？

煽った覚えもなければ誘った覚えもないけど。

「逃げたら酷くしちゃうよ。」

多分それは。

そうなんだらうつて漠然と思う。

日下は男色なわけじゃない。

自分でも言つてたし私もそう思う。

多分董の香りがそうさせていて。

私と同じところにいる以上それは避けられなかった。

ましてや魔力の補助をもらったから尚更で。

つてかそうなると私が悪いのか???

ぐるぐる考えてると後ろから抱きこまれた。

「わっ！！！」

私が声を出すと。

日下は私の肩口に顔を寄せて。

「エレノアってホント董の香りがするよな。」

そう言うんだ。

私は恐る恐る振り向いて。

「…眠るんならシャワー浴びたいんだけど…」

最後の方では消え入りそうな声で。

懇願してみた。

日下はスウェットを着ていて。

私を見たんだ。

「…それなら一緒に入ればよかったのに。」

さり気なく恐ろしいことを言う。

「バカ！！2人も入れるほど広くないだろうが！！」

私は敢えてそう言った。

だって恐ろしすぎてとにかく煽らないようにしないとそればっか考えてた。

何だって私はこんなに狙われるんだ〜〜（涙）と思いながら。

「シャワー室で逃げないって約束できる？」

私はそう言われて何の事だか理解できなくて。

「…逃げるってあれは密室じゃないか。」

そう言うけど。

「だってエレノアは瞬間移動できるだろう？」
「そう言われ思いついた。」

そうか。瞬間移動すればいいんだ。
こんな怖すぎる状況を打破するためには多少卑怯でも…。
と思ったら。

「もしそうなら俺今ここでお前襲うほど飢えてるんだけど？」
抱きついた腕に力を込められる。
ひひひひひ。怖い。

「…じゃあもし私が逃げなければ本当に眠るだけで済むって約束できるのか？」

私は逆に聞いたんだ。

「キスもダメだ。」

私は好きな奴としかしない主義なんだ。」

規制を掛けられる前に掛ける。

そうしないと私はこのままずるずるやられてしまう。

日下はうとうつと唸って。

考え込んでる。

つてか考え込んでる時点で問題なんだと思っんですけど。(汗)

「キスもダメってそれはちょっと。」

「あほ。私なんかとキスして何が楽しいんだ！！？」

「だって…チビじゃないけどいい香りするし…」

抱きしめてもらって眠るのにエレノアの顔がそこにあるのに出来ないって敵しすぎ…。」

「…変態。」

私は思わず呟いたんだ。

「変態で結構。何でもいいからキスだけは許して？」

「嫌なこつた。」

キスするなら絶対一緒になんか寝てやんない！！！！
こつなつたら意地で。

だけと言った瞬間ベッドに押し倒されたんだ。

「なつ！！！！」

日下はこんなことだけ手際が良くて。

私は散々暴れたけど放してくれなかった。

…放してくれなかったんだ。

誘う心 1

私は散々暴れたんだ。
結構本気だった。

だって貞操の危機が~~~~（涙）

だけど日下は放してくれなかった。
暴れる私をいとも容易く受け流して。
私の両腕を片手で拘束したんだ。

「全く跳ねっ返りだよな。エレノアは。」
呆れた物言いで日下は言った。

私は押し倒されたまま下から睨む。

「放せて!!!」

「ヤダ。だってエレノア逃げるし。」

「当たり前だろうが!!!」

「だったら尚更放すわけにいかない。」

「卑怯者~~~~!!!」（涙）

「卑怯ってエレノアの方が卑怯でしょ？」

逃げないって言ったのに逃げるし。

キスもさせてくれないし。

俺を本気にさせたのはエレノアだろうか？」

私がいくら睨んでも。

意に介した風もなく。

日下は空いた片手で私の服を脱がせにかかったんだ。

私の服は着るのも大変なんだけど脱ぐのも大変で。
ボタンも隠しボタンがけっこうあるから慣れないと大変なんだ。
当たり前だけど片手で脱がそうたって無理な話で。
私は茫然と日下の様子を見てたんだ。

「…エレノア。この服どうなってんの？」

日下は聞いてきた。

「…。」

私は敢えて無視した。

だって人を羽交い絞めにして。

人の言うこと聞かないで。

拳句やらしいことしようと思ってる奴になんか教えるもんか。

私は意固地になって。

無視し続けることにしたら。

「エレノア。言わないなら犯すぞ。」

怖い低い声で日下は呟いたんだ。

「…それは脅しか？」

私は虚勢を張って。

でも怖くて。

言ったら。

日下は私の服に手をかけ破こうとしたんだ。

「いや~~~~~（涙）」

やめて~~~~~。」

私が絶叫すると満足そうに私を見て。

「初めからそういえばいいのに。」

そう言った。

私は手を拘束されたまま。

日下は片手で首周りのボタンを外したんだ。

そしてペロツと舐められた。

「ひゃっ!!!!」

情けないことに私は声を上げて。

声を出すと日下が喜ぶって判ってるから声を上げたくないのに。
声が出るんだ。

「エレノアってホント女みたいに肌が白いよな。」

散々私の首を舐めて。

言った言葉がそれだった。

「…嬉しくない!!!」

私はせめてもの抵抗で。

息も絶え絶えだったけど。

そう言ったんだ。

「どうする？キスさせてくれるなら俺最後までやらなくても良いけど？」

日下はやらしい笑みを浮かべて。

にやにや笑う。

私はきつと頭に酸素が行ってなかった。

何でも良いからこの呪縛から解き放たれたかった。

「…判った。キスしていい…っ」

そこまで言う前に荒々しくキスされた。

私は気が遠くなり。

多分気をやったんだった。

誘う心 2

私が目覚めたのは太陽が昇るころの時間だった。

私は日下の腕の中で抱きしめられたま眠ったらしい。

何か言い争ってキスされて。

それから覚えてない。

しかもシャワー浴びてないから気持ち悪くて。

よく寝たわりに疲れはとれてなくて。

服は…破かれてないし。

体にも別に異変はなさそうだったから。

多分日下は私にキス以外何もしなかった…と思いたい。

私は日下を起こさないように腕の中から抜け出そうとしたんだけど。

寝てるくせにかなり力が強くて。

私の力じゃどけることさえ無理だった。

仕方なく私は。

日下に声をかけたんだ。

「…日下。日下。」

「ん?」

「ちょっと私シャワー浴びたいんだけど?」

「だ〜め。エレノア逃げるから。」

「おい。寝惚けんな!!」

早く放せ。」

私は思わずげんこつを日下に見舞った。
「いつて〜」

日下は思わず私を放して。

涙目で私を恨めしそうに見た。

「昨日はエレノア可愛かったのに。」

「っ!!?!? なっ!!?!?」

「昨日は俺に迫ったじゃん？」

熱烈なキスしてくれたくせに。」

…覚えがないし。

ホントなのか?と問いただしたくなる。

だけど覚えてないから日下は好き勝手ほざくだろっし。

だから敢えて聞かなかった。

そしたらニヤニヤして日下が言うんだ。

「昨日はそこの女より可愛かったしvvv」

「うるさい!!そんなことは知らん!!」

「でもエレノア泣くから最後まで出来なかったんだよね〜」。

ちっ。残念。」

「ない…っ!!」

深い深いキスをされて。

私はまた窒息状態になる。

「~~~~っっ!!」

でも日下は放さなかった。

…放してくれなかった。

「…もうヤダ。」

私は空気を求めて喘いだ。

「ほら。また誘うから俺も歯止めが効かなくなるんだよな〜」。

エレノア色っぽいし〜vvvvv」

またキスされる予感がして。

私は切れ切れの体力で。

腕から逃れようと一生懸命暴れたんだ。

キスされると自分じゃなくなるみたいで。

こんなに自分がキスに弱いだなんて思わなかった。

自分が怖かった。

「お願いだからもう放して。」

明らかに半泣きで。

私は目下を見上げたんだ。

誘う心 3

「ああ。俺ってエレノアのその顔に弱いんだよな。何処かで聞いたようなセリフで。日下は私を掴んでた腕を放した。」

昨日の怖い雰囲気は影をひそめ。初日に会った日下に戻っていたから。私を放して。

私はすぐにベッドから抜け出した。

携帯を掴んで外に出る。

瞬間移動できるくせに。

無性に聖の声が聞きたかった。

「もしもし？エレノア？

どうした？」

ボタンを押して。

電話越しに聞こえた聖の声が愛しくて。

「…聖。」

電話かけたけど何を話していいかは判らなかつただけだ。

ただどうしても声が聞きたくて。

「ごめん。こんな朝早く。」

どうしても声聞きたくて。」

私がいやとそう言つと。

聖はクスクス笑って。

「お前。瞬間移動できるのに電話なんてアナログ手段で。」

「…から。」

「えっ？」

「聖に会うと私縋りそうになるから。」

電話にしたんだ。」

「へえ〜？」

聖はこの間変な別れ方したから。

私に優しくかった。

「エレノア。」

名前を呼ばれ。

「ちゃんとしつかりしろよ？」

俺も講師の仕事見つけたんだ。

エレノアほど魔法教えるの上手くないけど。

エレノアが俺を好きでいてくれるなら無理強いはしないから。

誓うから。」

私は泣けてきて。

「うん。うん。」

私頑張るから。」

そう言っつて電話を切った。

私の思考は女よりなのかもしれないなどどっつすら思っつて。

1人自嘲の笑みを浮かべる。

こんなことで負けてたまるか。

私は意を決して部屋に戻ったんだ。

「何？電話してたのか？」

私が携帯を自分の机に放ると日下が声をかけてきた。

「…ああ。」

聖に伝えたいことがあつて。」

「こんな朝っぱらからか？」

「ああ。アナログだと笑われた。」

「そうだろうなあ。」

日下は感慨深げに言ったんだ。

「聖さんやエレノアみたいに魔法使えれば携帯だつて必要ないですよっ?。」

「そうかなあ？」

私がそう呟くと。

日下が先を促した。

「だつて声聞くだけで励まされたり。」

メールや手紙でも嬉しかったり。

魔法つてそんなん飛び越えるでしょ？

緊急なら仕方ないけど。

使えてよかつたと思うかもしれないけど。

私は魔法より通信手段が好きだな。」

声を聞くだけで励まされる。

手紙を見ただけで心が温かくなる。

多分昔からの通信手段つてそれが良いんだ。

「俺は昔から魔法が使えるようになりたくて。ヒーリングも瞬間移動も。」

心読みだってできたらいいなって今でも思ってる。だって好きな人にすぐに会えたり。

心さえもらえるでしょ？」

私はそれを聞いて悲しかった。きつと悲しい瞳で日下を見てた。

「心さえもらえないから」

私たちは無事に生きてるんだと思う。

「人の気持ちを变えることは魔法でも不可能だから。私たちはコミュニケーションを取ろうとするんだ。」

不安なのはいつの時代も一緒に。きつとね。

だけど「だから」

私たちは本を読んで。勉強をして。

人の気持ちを「理解」しようとするんじゃないの？

人の顔色を読んで。

その人が「何を思ってるか」量ろうとするんじゃないの？

「日下。」

私は日下に判ってほしかった。

それは根本的で多分魔法を使う上で1番大切なこと。

「何？」

「魔法は人の気持ちを量る道具じゃない。

人の気持ちを魔法で左右してもそれはまやかしに過ぎない。

そんな気持で魔法を学ぶ気なら私はお前の講師にはなれない。

そのような思いの講師を探すんだな。」

「なっ!!? どういうことだよ?。」

「だから私はお前に魔法を教えられないって言ってるんだ。」

「何でいきなり?。」

「だってお前今言っただろう?。」

魔法で心さえももらえるって。」

「…言ったけど。」

「…魔法で心をももらえるのならみんな苦労しないって。

今言った通りだ。

もし心さえ魔法で左右できるって思ってるならそういう思いを持った講師に魔法は習えと言ってるんだ。」

「だって何で?。」

エレノアだってそう思ってるんじゃないのか?。」

「…私も堕ちたものだな。」

私は自嘲の笑みを浮かべて。

エレノアだってそう思ってるだろうって日下に言われたセリフが痛くて。

「…私は人の心を魔法で変えられたとしてもそれはまやかしで。

本当じゃないって思ってるよ。

例えこの先聖が心変わりをして私じゃない人と一緒に歩いて行く
と決心したとしても。

それは私には関知できないことで。

だからって魔法で心を取り戻そうとしたとしても、
手に入れたように見えたってそれは偽りに過ぎないんだ。」

偽りは要らない。

真実が欲しい。

そう思ってる。

「聖さんはそう思ってたなくても？」

「…相手は関係ない。」

あくまで自分と魔法の関係だろう？」

「ちえっ。」

心もらえれば楽じゃん？って思ってたのに。」

「…どうする？」

そんな気持ちじゃきつと私が教えても炎さえ起こせないと思うぞ？
魔法には心が一番反応するから。

私を今騙したように見えても魔法は正直だから多分使えないぞ？
それでも望むなら他の講師を探せ。」

「エレノア。冷たい。」

「冷たくて結構。」

お前みたいなのを甘やかしたら後悔するのは私だ。」

「うっうっうっ（涙）」

もうバカなこと言わないから教えてください。

お願いします。」

私はため息を1つ吐いて。

魔法書を日下に渡した。

それは初級の魔法書。

まずは自分を見つめなおすことから魔法習得は始まるから。

「私がシャワーから上がってくるまで読んで。」

日下は神妙な面持ちで読み始めたんだ。

魔法習得の奥義 2

アスカもそういえば勘違いの極みだったなって思いだす。
黒魔法を平気で唱えて。

蓮っ葉で。

人に媚を売るのも何とも思わないで。
プライドもなく。

あるのは妙な容姿に対する自信と。

私に対する侮蔑の眼差し。

頭は悪くて。

頭が悪いから悪魔召喚を平気で行って。

その代償が永遠に年を取れない体と。

醜い心。

若さを持続させてみんなに気味悪がられて。

きっと永遠に死ねなくて。

魔法でもどうにもならなくて。

きっとそれが魔法を侮った末路だ。

「どうだ？」

シャワーから上がって日下に問う。

「…難しいな。」

魔法を唱えたとしても望んだ結果にならないこともあるってどう
いうこと？」

「うん。それから？」

「望んだ結果にならなかったとしても恨むと逆効果だって？」

「そういうこと。」

心が魔法には大きく作用するからな。」

「じゃあ。魔法を恨むと魔法に使われるってこと?」

「…まあ。そういうこともあるってこと。」

例えば助けたい人がいて助けられなかったとしても魔法の所為じゃないし。

ましてや自分の所為でもない。

それを運命って言うんだ。」

運命は魔法でも抗えない強いもんなんだ。」

へ〜と日下は頷く。

「だけど要は後悔しないために自分がどれだけできたかが魔法が上達する力ギだ。」

後悔しないために生きていくって魔法使えなくても難しいだろう?」

「じゃあエレノアは後悔しないで生きてる?」

「…私は魔法を使えるばかりに後悔だらけだ。」

苦しくて魔法なんか使えなければ良かったって思うことが良くある。」

何で?

日下は不思議そうにつぶやく。

だって魔法を使えるばかりに聖には思ってることがバレてるし。魔法を使えるから高みを目指すから。」

「好きな人に振り向いてもらえることなんてきつと奇跡に近いだろう?」

魔法使えなかつたらきつとこんなにいる考えないで済むだろうし。

例えば魔法を使つたらこの状況はどうなるだろうか？って考えあぐねて。

そういう時は魔法は使わないに限るんだけど。」

「…何か聖さんがエレノアを好きなの判る気がする。」

日下はにっこり笑つてそう言った。

「…そうか？」

「だって聖さん。」

エレノアに魔法かけて自分を好きにさせて。

無理やり体繋いでも良いわけじゃん？」

「っ！！！！（恥）

そんなことはっ！！！！（恥）

「でもそれしないんじゃない？」

手を出せないんじゃないって手を出さないんだ。

だってそういうことでしょ？」

「…だから何でそういう話になるんだ（恥）」

「だって人を好きってそういうことじゃん？」

エレノアだって欲はあるでしょう？」

恥じてるけどそういうのあるでしょ？」

私は日下を向き直つて。

「…私はきつと思考が女に近いんだろうって思う。

聖を好きだけど欲しいとは思わないし。

好きって言ってもらえるだけで幸せなんだ。

妹にもそれはおかしいって言われたけど。

本当にそうなんだ。

だからきつと私は体さえ差し出せるぐらい好きって思えないから。
本当は人を愛せない奴なのかもな。
体を繋げるのが最終的に人を愛したというのなら。」

「…そんなに董の香りさせて男誘ってるくせに。」
「ばっ!!!」

「誘ってない!!!!!!」

「否定したって無駄だつて。」

「誘ってる事実が変わらないんだから。」

「~~~~~つつつ。」

「もう良いから早く魔法書を読むんだ。」

私は日下の頭をたたいた。

魔法習得の奥義 3

「でもエレノアってズルイよな〜。」

日下は叩かれた頭をさすりながらそう言った。

「何がズルイって?」

「だってズルイじゃん?」

こつこつという話題になったら避けるんだもん。

勝手に話終わらすし。

俺はまだ納得してないのに。」

「…納得って。」

「だってそうじゃん?」

散々そうやって無意識に男誘ってるくせに。

無防備で。

ちよっとは自覚持てば?」

「…私は誘ってないし無防備じゃないっ!?!?!?!」

そこまで言ったらキスされた。

「なっっっ!?!?!」

「ほら。無防備じゃん?」

隙だらけで煽られてる俺って可哀想じゃない?」

「うるさい!?!?!」

私にまたげんこつを喰らわそうとしたら。

日下に封じられた。

「エレノア。ヤバいって。」

「私に欲情するのはお前が聖ぐらいなもんだ。」
「いや？」

俺の友達も言ってた。
エレノアってヤバいって。」

「…変態。」

「だってしかたないじゃん？
男なんだし。」

まあでも俺男色じゃないからキスだけできればうれしいvvv
だってエレノアの唇って甘いしvvv」

がこつと良い音がして。

私は日下の頭をはり倒した。

「エレノアつては酷過ぎ!!!」

バカになったら責任とってよと日下は喚く。

「…あほ。」

魔法使わないだけありがたいと思え。」

「だったら俺が魔法使えるようになったら。」

何かエレノア頂戴よ。」

「…何で私がお前に何かやらなといけない？」

「だって張り合えないじゃん？」

「そうだなあ。魔法1個習得できる毎にキス1回ってどづつ？」

「…やなこつた。」

私にメリット何もないじゃないか。」

「せつかくこんな煽らされてる俺が妥協案出してやってんのに拒否
かよ？」

「私は煽ってない。」

「煽ってんじゃん！！！！！」

また腕をつかまれ。

私は恐怖に駆られた。

こんな怖い思いするのなら。

キスの方がマシかもって思って。

早々に降参した。

「判った。判ったから手を離せ。」

私は降参のポーズで。

男が怖いだなんて情けないけど。

聖の時も怖くて。

だけどあいつは私の方が好きになって。

「じゃあ。手始めに洒落じゃないやつするから。

絶対約束守ってよ？」

日下はそう言って聖にもされたこと無いような深い深いキスをした。

「つつつ!!!!もう良いだろ!!!!」
息も絶え絶え。

キスされると自分の体なのに自分じゃないような感覚に陥る。

「あれえ?エレノア?

顔真っ赤。かわい〜。」「

やらしい顔で日下が笑うから。

私はいたたまれなくて。
悔しくて。

「早く朝ご飯食べて始めるぞ。

下の食堂に先に行け!!!」

私は平静を装うためそう言っ

て。日下の唇から逃れようとした。

「やだ。エレノアと一緒に行く。」

「やだっってお前…。」

私が呆れた声を出すと。

「エレノアと一緒に行く。」

だっつ〜何せパートナーだし?」

意図的に語尾を上げて。

日下は私の不安を煽る。

「だっつ〜。エレノアってば聖さん好きなの判るけどまた瞬間移動で会いに行っ

て。俺聖さんに殺されるのだけは勘弁だもん。

「何せ今冗談じゃないキスしたばっかだし？」
私はそれを聞いて何か笑えたんだ。

「判った。じゃあ待ってる。」

私はペンダントを探して。

着けた。

それは。

「何？それ。」

「ああ。これ？」

「そう。それ。」

「聖に貰ったやつ。」

「ふっふん。」

聖は皇帝との戦いのあと。

私にこのペンダントを持たせた。

これは。

魔力を少したため込む力があって。

私みたいに魔力を使いすぎる奴に丁度いい。

聖は言ったんだ。

「エレノアにはこれが丁度いい。」って。

「聖さんってエレノアをすごく大事にしてるんだな。」

日下がそう言ったから。

「…っん。そうかも？」

「そうだよ。きっと力になってる。」

そう言ったから。

「そうかもな。」
私は素直に頷いた。

ほら下に行くぞ。
私が促すと。

日下は私を引き寄せて。
またキスをした。

「なっ！！！」

「だって俺今妬いてるんだもん！！」

「はあ〜〜？」

「聖さんだけズルイって。」

俺だってエレノア好きだって。」

私は思わず後ずさりして。

「…嘘。止めろって。」

「いや。マジ。」

でも俺のはきつとエレノア壊すかも。」

私は思わず引いたんだ。

「あっ？引いた？」

「当たり前だろうが！！！！」

「まあ。でも多分エレノアがキスさせてくれて董の香り嗅がせてくれたらきつと。

多分だけど。

暴走はしない…と思うから。」

「ってか止めてくれ〜」（泣）

頼むから。」

私が絶叫すると。

「エレノア。それ傷つくんだけど？」

そう日下が言うから。

「まあでも。エレノアが聖さん好きな時点で終わってるって判ってるから。」

だからお願い。俺を暴走させないで大人しくキスだけさせて？」

私は気が遠くなった。

そしてまたキスされたんだ。

「っ!!！」

「ごちそうさまvvv」

「くさか〜（怒）」

絶対私は聖にはれませんようにと祈ったんだ。
だってばれたら絶対…

…止めとっつ。

考えただけで恐ろしいから。

聖。

会いたいよ。声が聞きたいよ。

でも今日はメールにしよう。

私は携帯を握りしめて食堂に向かう日下の後を追った。

白療養士 2

「違う。こうだ。」

手のひらに意識を集中させるんだ。」

その日から私は日下に魔法を教えることを始めた。

まず魔法書を読ませて。

講義から叩き込む聖に評判の悪い教え方で。

でも日下は聖と違って文句は言わなかった。

理屈を言ってもちゃんとしてきた。

文句も言わずに。

「手のひらが温かくなるって念じてみる？」

私がそう言っても全く生まれ持って魔法を持ってない家系に生まれ
た日下がそうしても。

全然ダメだった。

聖みたいに初めからMR使える人間は多くはないから。

まあ難しいかもと思う。

「…結構難しい。」

日下は手のひらをジッと見て。

気を集中させる。

そのうち顔が真っ赤になってきたから。

私は。

「ちょっと休憩しようか？」

そう言った。

「は〜。疲れた。」

日下は座り込んで私を見上げ。

「エレノアはどうやって魔法習得したんだ？」

そう聞いてきた。

「私は初めからヒーリングは持ってたからそれをコントロールできるようになっただけで。」

元々親がカードマジシャンだったらしいからその素質は血筋として持ってたんだろう？」

そう言つと。

「いいなあ〜。エレノアは。」

苦労してないじゃん？」

「そうか？私は魔力が人より足りないから使える魔法も少ないんだけど？」

「それでも。」

それでもヒーリングさえ使えばいいじゃん？

怪我しても治せるし。」

日下はヒーリングに異様に拘りがある。

「…日下。」

何でそうヒーリングに拘るんだ？」

私は疑問で。

攻撃魔法に拘るなら判るけどヒーリングに拘るのは珍しいから。

「だって…。」

ヒーリング使えたらあるいはもしかって思ってることがあるんだ。

「

「へえ〜？」

私が先を促すと。

「エレノアが最後までやらせてくれたら教えても良いよ？」

そうはぐらかした。

私は「あほ」と言っ

その話を終わらせたんだ。

だってその会話してたらもしかしたらヤバい方向に行くかもしれないし。

私はそれは避けたかったし。

大体魔法使えるようになりたい人の理由なんて人それぞれだから。理由なんか知らなくていい。

「ほら。お前の頑張りにかかっているから頑張れ。」

私が肩をぽんぽんと叩くと。

日下は私の腕を掴んで。

「エレノア。魔力をちょっと貸して？」

俺炎が手のひらから生まれる感じを掴むから。」

そう真剣に言った。

「…やってみる。」

私は日下の空いてる手を握った。

私の魔力は日下の体を通って手のひらから炎を生む。

「それがファイアだ。」

私はそう言った。

白療養士 3

「…これがファイア。」

人を通して魔法を使う場合。

私限定かもしれないけど熱くない青い炎が生まれる。

「綺麗だな。」

日下はそう呟いて。

私の手を放した途端その炎は消えた。

「えっ？」

驚いて私を見る日下は面白くて。

「…当たり前だろう？私の魔力で炎は生まれるのに。

私の手を離れたら消えるに決まってるじゃないか。」

「エレノアってば酷過ぎ！！！！」

日下は私を捕まえてくすぐってくる。

「やつ！！やめっ！！」

日下は手を緩めず。

服の中まで手を入れようとしてくるから私は思わず。

魔法を唱えた。

それは子供がえりの魔法。

日下は小さな子どもになった。

「ひどいつ！！！！エレノア！！！！」

「うるさい！！セクハラ野郎は少しそうしてる！！！！」

正直上手くいくとは思ってなかったのに。

日下は案外魔法にかかりやすい体質みたいで。

「…エレノア。ごめんって。」

もうしないからこの魔法解いてよ。」

情けない顔で私を見る日下の様子はチビに似てて。

「お前。そうしてるとチビそっくりだな。」

そう言うつと。

尚更嫌がって。

「ごめんって。エレノア。」

エレノアの許可なしに体触らないから魔法解いて?」

「…それは私の許可をもらえば好き勝手するってことか?」

私が眉根を上げると。

日下は情けない顔で。

「滅相もありません。何もしません!!!」

そう言ったので。

私は魔法を解いてやった。

もの凄く不本意だけどあんな風に見てくるから。

何だかすごい悪いことしてるみたいで。

「全くエレノアったら酷いんだから。」

俺に力で勝てないからっていきなり魔法使うだなんて。」

そつぶつぶつ言うつ日下に私は。

「…早くファイア習得しろよ。」

話はそれからだ。」

そう言うつと。

「あれえ?エレノア。」

俺がファイア習得したらキス1回だからね?

まさかキスしてほしいとか?

俺の方はいつでも大感…」

私はまたガコツと日下の頭をはたいて。

「黙れ。セクハラ野郎。」

私は別にお前が魔法が使えるようが使えるなかるうが知ったこつちやないんだ。

お前が困るだけだろう？」

そう冷たく言い放つと。

妙に神妙な顔で。

日下が言った。

「冗談抜きでもう1回だけでいいから。」

もう1回ファイア教えて？」

「…やだ。お前やらしい事しようとするから。」

「ごめんって。」

もうしないように努力するから。」

「努力だつて…？」

私が眉根を上げると。

「エレノア。お願いします。」

教えてください。」

その頭を下げる日下に私は折れてしまった。

「…じゃあもう1回。」

手を貸せ。」

私は日下の手を握って。

神経を集中させる。

日下の手には青い青い炎が。

「…綺麗だな。」

また日下が呟いた。

手をつなごう。 1

「俺さ。治ってほしい人がいるんだよね。」

日下が青い炎を見ながら呟いた。

「えっ？」

「いや。俺奨学生だし悠長なこと言ってる場合じゃないんだけど。

白療養士なれたらいいなって思った理由。」

私は聞き返さなかった。

だって人には事情があつて。

聞かれたくないことだつてあつて。

多分日下は私に気を遣つてる。

「…別に言わなくていい。」

事情は人それぞれだつて判つてるから。」

私が遮ろうとすると。

良いから聞いて？と日下が私を制して。

「その人兄貴の彼女だった人で。

飛び降り未遂したんだ。」

そう言った。

「骨も砕けてもう立てないつて。

植物状態になつてもう5年目で。

でも俺は奇跡を信じたいんだ。

だって呼吸は自発でしてるんだ。

起きないわけないつて立てないわけないつて。

そう思うのはいけないこと？」

「でもヒーリングでは治せる保証はない…。」

「でも怪我だけでも治せたら。」

もしかしたら呼びかけにさえ答えてくれるかもしれないだろ?」

万に一つにかけたいんだ。

そう日下は言った。

私には何も言えなかった。

治るよって言いたいけど保証はないし。

日下が魔法を習得できる保証もない。

「白療養士って最近出来た職業だけど。

俺にとっては1番なりたい職業なんだ。

ヒーリングに関わってヒーリングに賭けて。

この手の上の炎なんか起こせないんじゃないって判ってるんだ。」

「日下…。」

「エレノアにはきつと。

俺みたいに才能のない奴の足掻きなんかホント判んないと思うけど。」

俺。焦ってるんだよ?

半年間でヒーリングマスターしなくちゃって思ってた。

でも炎すら起こせないなんて俺才能なさすぎじゃん?」

日下は私の手を放して。

炎が消えるのを見た。

「ほら?すぐに消えるだろ?」

「やっぱり俺には才能ないのかなあ？」

「日下。」

日下はいつになく真剣だった。

私を見つめ。

言ったんだ。

「やっぱりエレノアでも俺は手に負えない？

魔法の才能なさすぎ？

やっぱり望むのが無理なのかなあ？」

「…判った。

出来るだけ手をつないでいよう。

そのうち日下も魔法の足がかりにできるかも。」

私に触れて魔力に触れる。

魔力に触れて魔力の感じを掴む。

それでうまくいかないかもしれないけど。

私にとってもきつと大切なこと。

この世で思い通りにならないことはたくさんあるけど。

でもだから生きてるんだよね？

だから生きてるって信じたいし。

信じてる。

夢見ても罰は当たらない。

むしろ夢がもしかしたら日下に与える影響は大きいかもしれないんだから。

手をつなごう。 2

「もしかして日下。
照れてんの？」

あれだけ尊大に私にキスして。
私を困らせてるのに？」

「だってエレノア似てるんだ。
兄貴の彼女に。」

「…女に似てるのは嬉しくないな…。」
私が嫌そうな表情で見ると。

「ああ。でも兄貴の彼女はもつと繊細で綺麗だよ。
でも綺麗すぎて抱きたいか思ったことはない。
純粹に好きなんだ。」

「…おいおい。
じゃあ何か？」

私には邪な感情持つてるだけでも？
喉の上まで出かかった言葉はかろうじて呑み込んだ。

ヤバイヤバイ。
私が文字通り煽ってどうする？

「それで近場にいるエレノアで俺は我慢しようと思ったわけ。
俺は男色の趣味は持ち合わせてないし。

エレノアだってそうだし。
男だし。

だけどキスぐらいいいじゃん？

キスぐらいなら男だつて判んな…っ。
イテツ!!」

私は日下の頭を叩く。

「あほ。身代わりなんか私はごめんだ。
キスなんかしなくてもその彼女とやらをずっと思つとけばいいだ
ろうが!!!」

「…だけど欲求とは別なんだもん。
仕方ないでしょ?男なんだし。」

日下は私の不意を衝いて抱きこむ。

「まっ!!!!」

またお前は!!!! (怒)」

日下の不埒な手が私の胸をまさぐる。

「本当にエレノアって惜しいよなあ。
胸あれば女なのに…」

この辺にでかい膨らみが2つ!
イテツ!!」

私は後ろから抱きこまれて。

だから頭突きをくらわせてやった。

「やっぱり手をつなぐのはナシ!!!! (怒)

お前はせいせい自分であげ!!
セクハラ野郎に教えてやることなんかない!! (怒)」

「エレノア…酷い… (涙)」

「酷くないっ!!」

身から出た錆だろうが!!!!」

私は言った途端恐怖を感じて。
振り向くと日下がマジな表情で私を見ていた。

「エレノア。」

声の調子がちよつと違う。

呼ぶ声がちよつと違う。

私は地雷を踏んだかもと後悔した。

でも日下が悪くて私は悪くないはず。

だけど。

怖い。

「判った。判ったから。」

私は先に降参のポーズをとる。

我ながら情けないけど。

「手はつなごう。」

判ったから。」

日下は私を抱きこんで。

「…エレノアってばズルイ。」

先に言えば俺が無茶できないって知ってるな？」

そう言った。

だって怖いんだもん。

怖い時は早くに降参したらどうにかなりそうだし。

「…抵抗してくれば今なら男色じゃない俺でもエレノア抱けそうなのになあ。」

そう怖いことを言う。

「日下の変態!!!」

私は日下の手を掴んで魔力を送った。

日下は瞳を閉じて。

魔力を感じ始めた。

手をつなごう。 3

日下の太陽のような笑顔は魔法を習得しようとすると言っていると消えてきた。太陽のような笑顔を持てる人間は少ない。

「日下。この頃あまり笑わない？」

私がそう言っていると日下は。

ヤラシイ笑みを浮かべ。

「そう？俺は結構エレノア狙ってるから笑ってると思っただろ？」

「…そういう意味じゃなくて。」

どうしたんだ？焦ってるのか？」

私はため息をつきながら聞いたんだ。

「…焦ってないわけないだろ？」

あいついつまで生きててくれるか判らないのに。」

それは悲痛な叫びだった。

「焦るな。」

焦ってもますます上手いかないだけだ。

判ってるだろう？」

手を握って私と日下のスタンスは変わらないけど。

やっと日下は炎を手の上で起こせるぐらいになったただけだった。思ったより長くかかって3か月でようやくで。

「エレノア~~~~vvvv」

抱かせて？

俺こんなじゃ参っちゃうよ。」

欲求不満で。

そう言っただけ抱きこんでくるのもこの頃は珍しくなくて。

「あほ。」

ヒーリングマスターするんだろっか？

寸暇を惜しんでる暇はないと思うが？」

私はビシッといつも通り日下を制する。

嫌だとかダメだとか。

そういう言葉は日下をますます助長させることにこの頃気づいたから。

おかげで私はうるたえなくなった。

「チツ。エレノアってはこの頃耐性つけてきて面白くない。

前はもっと可愛くてうるたえて俺ってばその可愛さにやられそうだったのに。」

「ふん。可愛さ求めるならその彼女とやらにしる。」

「エレノアってばヤラシイ〜。」

何考えてんの？

俺は純粋な気持ちなのに〜。」

「何が純粋だ。何が。」

「だって純粋に好きだし〜。」

「…っつかその彼女さんとやらは名前は？」

「ん？香澄。」

沢渡香澄。」

「へえ？女優みみたいな名前だな？」

「ん。俺も初めて聞いた時そう思った。
でもエレノアだってエレノア・エアディールってあんた。」
「…何で私がそこで出てくるんだ？
私の事は放っておけ。」

「だつて〜。男だったら一番にエレノアをお願いしたいんだもん。」
「〜〜〜っつ。」

お願いしなくていいから。（脱力）

「…香澄さんは俺の兄貴が死んだとき。
悲しそうに笑ったんだ。
それが最後だった。」

次に会った時はもう話もできない状態だったよ。」
日下は私の手を握って。

「エレノアみたいに俺に言ったんだ。
聖也君は太陽みたいに笑うねって。
俺はてんでガキで。
その時からだったか。
香澄さん好きになったの。
理由なんてなかった。」

「…人を好きになるのってそんなもんだろ？」
「…ええ？俺もエレノア好きなんだけど？」
「…だから何でそこで私が出てくるんだ？」

「だつて〜。エレノアの顔めっちゃ好みなんだもんvvv
香澄さんの顔より顔だけなら好きvvv。」

「…宣言されても困るんですけど？」

「あ〜あ。」

エレノア女だったらよかったのに〜。

既成事実作って速攻ではらまして籍に入れてやるのに。」

「…ばか。」

そんなバカなこと言っていないでほら。

ヒーリングの練習しろよ。」

「…スル〜ってわけね？」

「当たり前だろ？」

お前の戯言に付き合ってる暇はない。」

私がそう言い切ると渋々また魔法の練習をさせた日下に。

私はため息をつく。

まったく何考えてるんだか。

でも不思議と私は嫌な思いはしなかったんだ。

死神能力 1

「どんな感じだ？」

後ろから声をかけられ。

振り向くと聖がいた。

「ああ。聖。」

「あいつ。やっと炎起こせたのか？」

「…まあな。」

「エレノアも俺といい日下といい似たようなのに好かれるからなあ？」

「…でも日下は彼女さん好きみたいだし？」

私がそう言うと聖は抱きしめてきた。

「う〜〜ん。でもエレノアの香りってホント癒されるVVV」

私は目を細めて。

「そうか？」

そう呟いた。

「そいえば聖の新しい教え子って誰になったんだ？」

聖は別に私を追いかけてきたわけではないけれど。

講師になって。

配属がたまたま私がいるところで。

聖はお姉さんと一緒に住んでたアパートを出て。

此処のアパートを借りた。

私と一緒に住みたいと言ってたけど。

でも厳然として生徒の日下がいるものだからそれも叶わず。

仕方なしに聖はアパート申請をしたんだった。

「ああ。女だったよ。

俺より少し若いぐらいの。」

「ふっふん？」

「妬ける？」

「…妬けるっていうか。

出来れば日下と代わってほしいぐらいだ。」(凹)

「…でも妬けるだろう？」

エレノアは俺の事好きなんだし。」

「…まあ。

でも相手が女じゃ仕方ないかなって思う時もあるけど？」

「俺は未だに日下と一緒に住んでるの許してないし。

ましてや日下のチビにキスさせてたのだって思いだすだけではらわたが煮え繰り返りそうだけど？」

「…聖。いい加減にしてよ。

根に持つのも度が過ぎるとヤバいって。」

私が振り向いてキスを落とすと。

聖は私を力いっぱい抱きしめて深い深いキスをした。

「あああああああ。エレノア〜。」

そこへ日下が現れて。

「何だ？日下？」

「エレノアってば酷い〜」(涙)

いくらアキヤさんと付き合ってるからって俺の前でいちゃつかなくても〜」(涙)

聖は怒るかと思ったけど1つ大きなため息をついて。
私に言ったんだ。

「…俺以外に絶対触らせるなよ。」

そう言って。

私の部屋を出て行った。

聖は私に心で呟いたのはきつと。

日下には伝わってない。

「少し焦らないと手遅れになるぞ。」

その意味は。

まだ会ったこともない日下の大事な人沢渡香澄が。
天に召される日は近いということ。

聖は魔法でその能力も身に着けた。

滅多に使わないけれど。

命が体から離れようとするのが判る力。

…判らなくていい力だった。

死神能力 2

死神はコッソリと忍び寄る。

いつどこで自分の命が尽きるかなんて判らないし判りたくもない。

だけど。

聖はその能力を会得した。

聖は望んでなどいなかったからその能力を忌み嫌う。だけど。

こうやって私が必要な時に教えてくれる。

眉根を寄せて辛そうなまなざしで。

私はだから聖が好きになった。

聖は魔法を侮らなかつたから。

私の事は随分とコケにしてくれたけど。

でも最終的には戻って来て。

私の命を救ってくれた。

その熱い魂で。

「…日下。」

沢渡香澄さんはどんな調子だ？」

それとなく聞いてみる。

「…何で？」

日下はいぶかしげな眼差しで私を見て。問う。

「…いや。ヒーリングが間に合わなかったらどうするつもりなのか

なつてただ思っただけ。

日下はどうしても助けたいんだろう？

自分の力で。」

「それはどういう意味？」

「もし私に会わせてくれたらあるいはなんて思っただけ。

お前がヒーリング使えるようになるのにきつと1年はかかると思
うから。」

「…ICUに入ってるよ。」

当たり前じゃん？

話も出来ない目も開けられない。

ただ横たわって自発呼吸が出来るだけなの？」

「……………」

「見てて辛いよ。」

香澄さんが死んじやうっていつも苛まれてるよ？」

私には言葉がなかった。

何も言えなくて。

「でもエレノアも言ったじゃん？」

もし仮にヒーリングを使えても治る保証はないって。」

「…そうだ。私たちは神さまじゃないから。」

魔法をちよつと使えて治癒能力をちよつと助けるってだけだから。

「

「…聖さんになんか言われたの？」

こつというときだけ日下は妙に聴くて。

私は首を振って。

「違う。」

今まで香澄さんとやらに会ったことないから会ってみたって思っただけ。

何よりお前の魔法習得が思ったよりかかりそうだから。」

「それは俺が落ちこぼれだって言いたいわけ？」

「いや？それは習得のスピードには個人差があるから。」

そうじゃなくて…上手く言えないけど。」

「…エレノア。」

真剣な声で私を呼ぶから。

「あのさ。そんな遠まわしに言わないで？」

俺は魔法習得に向いてないんだってはっきり言ったらいいのに？」

「…違う。」

そうじゃない。日下。

向き不向きなんてあんまりないんだよ。

こと魔法習得には。

要は気持だから。」

日下は私の真正面に来て。

「…でも結局俺は奨学生だから？」

片親だから？

好きな人も自分の力で助けられないからエレノアがそれを代わりにしてくれるって言うんだろ？」

…私は息が吐けなかった。

違うと言いたいのにな声が出ない。

「悪いけどエレノア。」

それは聞けない。俺が自分で香澄さんを治したいんだ。

じゃないと俺エレノアを恨んじゃうよ。

もしエレノアに香澄さんを託して香澄さん助けられなかったら。」

「…日下。」

「ヤダな。エレノア。」

「そんな顔して。」

「…今日か明日かとにかく近々峠なんだって。」

「香澄さん。」

私には嘘は吐けなかった。

此処で嘘を吐くときつと。

日下を余計に苦しめる結果になると思っから。

「…そんなのまで魔法で判るの？」

私は頷く。

「…その人に会ったこと無くても日下の話を聞いて。思いを馳せたら判ることだってあるんだ。」

…魔法って痛いだろう？

判らなくていいことまで判ることもあるんだから。」

日下は私を抱きしめた。

「…日下？」

「…ごめん。エレノア。」

「ちよっとこのままで居させて？」

日下は泣いてたんだ。

私の肩に顔を埋めて。

静かに涙を流していたんだ。

核心 1

「…あのさ。日下。」
私は日下に抱きしめられたまま。
言葉を探す。

「近々山場だなんてさっき言ったけど。
外れることだってあるわけで。」

「魔法が唯一絶対ってことは…。」
「…ないのは判ってる。
だけどなんか俺死刑宣告受けたみたいだ。」

「…何だかわかるような気がした。
日下が言ってる意味。
大事な人の命が消えようとしてるだなんて。」

「…どこかで聞いたことがあって。
死のおいがするんだってね？
もうすぐ死ぬって人は。」
「…そうなのかな。」

「でも俺は諦めない。
香澄さんは生きるって。」

「1人でも良いからそう信じてやらなきゃ香澄さんかわいそうすぎ
じゃん？」
「…そうだな。」

「確信はない。
あやふやだけど。」

その中に希望を見出す。

ああ。日下の強さはこんなところなんだ。

改めて気づかされる。

「…ごめん。ウソ吐けなくて。」

私が謝ると日下は。

「…何で？」

エレノアは教えてくれたんじゃない？

むしろ感謝してるよ。」

「でもお前が気づかなければ私だって言わなくて済んだかもしれないのに。」

「でもそれだときつと俺はエレノアを恨むよ。」

間接的に聖さんも。」

「…ごめん。」

その時だった。

また日下が触れるキスをしてきたときだった。

「またっ！！お前は！！（怒）」
と怒ろうとしたときだった。

私の目の前にビジョンが映って。

そのビジョンには。

日下に似た風貌の男と私に似た風貌の女と。

私がこの間日下のお母さんを助けた公園とが映った。

そして暗転。

キラッと光るのはナイフ。

それを握ってたのは…

核心 2

「よく言うよね？」

その像が動く。

「私愛してるのに。」

「俺は何度だって断ったろう？」

彼女ヅラだっていい加減にしるよ？」

「だけど私聖也君だっけ？」

おねえさんになるのなら私が良いって言ってくれたわよ。」

「香澄。お前バカじゃないのか？」

中坊の言うこと真に受けてどうする？」

「そつちこそ酔った勢いにしる責任取りなさいよね？」

「はっ！！笑わせるな。」

俺がいつお前に手を出したよ？」

女はナイフを手に。

男を脅し。

バイクに乗せた。

そして切りつけて言うんだ。

「愛しすぎて憎いっ！！！！！！」

その言葉を最後にその像は消えた。

「エレノア??どうした？」

いつもなら抵抗する私が。

キスされたまま固まったものだから日下は唇を離し。
私の様子をつかがったんだ。

「…日下。」

私呼びかけると日下はこちらを回いて。

「…何？」

「日下。もう一回キスして。

デープなやつ。」

「お。エレノアからのお誘い？

何？

俺に鞍替えしたの？」

私はあの像が見たくて。

日下を引き寄せてキスしたんだ。

唇からあの像が浮かぶ。

そして。

全部が見えたんだ。

チビの嫌な感じは予感じゃなくて。

日下の母親が襲われたのも偶然じゃなくて。

公園におびき寄せられたのも偶然じゃなくて。

事の発端は日下の兄貴に沢渡香澄が惚れたことから始まり。

それでまさか日下自身が魔法を習得しようと思っと思ってなかった

香澄の誤算のお陰で。

すべてがつながったんだ。

沢渡香澄は魔法が使えたんだ。
人の心を操る魔法は使えても、
人の心を自分に向かせることは無理だった。

限界に近づいた香澄は。

日下の兄貴を事故に見せかけ殺し。

自分は飛び降りをして助かるつもりはなかったんだけど。

偶然通りかかった親切な人が。

助けてくれて5年も苦しんだ。

意識はあるのに動けなくて。

頭で描いたのは犯人を別に仕立てて。

自分は恋人を殺された可哀想なヒロインを演じる。

それがばれそうになったから今度は日下の母親を襲う魔法を誰かに
かけて。

同じ公園で。

でもそこに現れたのは日下と魔法を使える私だったんだ。

魔法を使える者同士は反響しあうから。

香澄は魔力を急激に落としたんだ。

今なら。

今なら全部合致したんだ。

「日下。冷静に聞いてほしい。」
私は日下に向き直った。

核心 3

「…香澄さんは死にたがってるみたいだよ。」
私は呟いた。

「…何で？」

日下は表情を崩さなかった。
今露呈してきた事実は真実で。

それは聖が今日か明日か近々山場だと教えてくれたから私の魔力が高まり。

日下にキスされて描いたフォルム。

私には死神能力もなければMRもない。

だけど人に触れ合うことによってその人の状況が判ることもある。

「…何をエレノアは見たの？」

俺がキスしたら様子がおかしくなっただんじゃん？」

「…公園でお前の兄貴が殺されるところ。」

私が呟くと。

「…それで犯人は？」

意外に冷静な瞳の日下がいて。

「…沢渡香澄。」

私が言つと。

「嘘だろう??？」

そう叫んだ。

「警察は犯人は男だって。」

「強殺されてるから女なわけないって。」

「…そんなもの魔法使えばいくらだってできるだろう?」

「でも。」

「事故に見せかけるなんて幼稚な手考えるのは女ぐらいだ。」

私は沢渡香澄の身勝手さに腹が立ち。

話の判らない。

判ろうとしない日下にも腹が立った。

「魔法も使えない脳なしの警察がそれを言うのか?」

強殺で済ませて進展はなし。

拳げ句迷宮入りだって?

「冗談じゃねえよ。」

私は遣る瀬無くて。

何より無邪気だったはずの日下を巻き込んで。

自分の思い通りにしたかった香澄は。

まさか自分を救うため白療養士になる志を日下が持つなんて思わなかっただろう。

そして私と出会い魔法を使えるようになるなんて思わなかっただろう。

自分は恋人を殺された可哀想な被害者を演じて。

可哀想だと同情を買いながら死にたかったんだろう。

でも私が1番許せないのは日下が奨学金を受けてまで香澄を愛してたのに。

その気持ち弄んだことだ。

「…エレノア。それは本当に？」

「ああ。香澄は意識ちゃんとおあるよ。

話せなくても立てなくても魔法は唱えられるから。

余計に思いがクリアだろう？」

私は日下を引き寄せて。

キスをした。

それは慰めのキス。

「…私に香澄に会わせてよ。

きつと起こしてみせるから。」

私がそう言つと。

澁々日下は頷いたんだ。

核心 4

私は絶対に許さない。

人の気持ちを弄ぶ魔法を使う奴なんて。

自分だけ寝てるなんて卑怯だろ？

日下は私をICUの前に連れて来て。

「…あれが香澄さんだよ。」
そう呟いた。

白い白いガラス張りの部屋に香澄は寝ていた。

それはさながら眠ってるかのようで。

あの臨終の面持ちとは少し違った。

ただひたすら眠ってるようにしか見えなかった。

私は制する日下を押しつけて部屋に入った。

心臓の音を刻むパルス装置が香澄の隣には設置してあった。

「…骨が砕けて立てない割に眠ってるようだな。香澄。」
私は香澄に声をかける。

だって私が1番嫌いな魔法を使う輩は許せなかった。

「…私さえ騙せたらどうにかなるって思ってたんだらう？
おあいにく様だったな。」

私には聖という付き合ってる奴がいて。

あいつには私には無い魔力がある。

死神能力だ。」

「エレノア。ちょっとひどいじゃん？」

香澄さんは……。」

「黙ってる!!! 日下。」

私は日下を遮り。

香澄に言う。

「おかしいと思ってたよ。」

何で聖が私にそれを伝えてきたか。

でも魔力って結構偉大で。

聖は魔力を1度だって侮らなかつたから死期が判るようになったんだ。

だけど聖は香澄が死にたがってるって言うてきた。」

一息ついて。

「死のうとしてる魂と死にたがってる魂だってちゃんと聖には判るんだ。」

私はお前を死なせない。

ヒーリングで治して罪を償わせる。

死んで楽になるうだなんてそうは問屋は卸さない。」

そう言うって手をかざしたんだ。

「やめてっ!!!!!!!!!」

香澄が反応した。

「…香澄さん？」

日下は状況が呑み込めてなくて。

私はヒーリングをかけながら言ったんだ。

「お前には日下の真摯な思いすら届いてなかったんだ。むしろ日下の思いをバネに日下の兄貴に迫って。」

拒否られたから自分の所為にならないよう細工して殺して。自分は悲劇のヒロインを演じて。

拳げ句自殺未遂を起こして。

日下の思いは本物で。

お前のためにお前を治すためにヒーリングを習いに来て。

それだけがお前の誤算。

でもそれが最大のミスだった。

そのおかげで私はお前の悪事に気づいたんだけどな。」

日下が息をのんだのが聞こえる。

香澄の傷はもうほとんど治って来て。

香澄が言ったんだ。

「何だよ？」

「何で死なせてくれないの？」

私はあの人を殺して自分も死のうって思っただけなのに？

聖也君何で要らないことするのよ？

私犯罪者になるじゃない!!!!!!」

∴それが香澄の答えだった。

殺人。

殺人隠ぺい。

殺人未遂ほう助。

警察へ行ったら。

きっと20年は出られないだろう。

悪質でしたたかな罪だから。

悲しい結末 1

「あなたにだって判る筈よ？
だってあなただって付き合ってる人に裏切られたら殺したくなる
でしょう？」

私はそう言う香澄を見て。

悲しくて辛くて。

人を好きになるのって理由じゃないけど。

でも理由でもあると思う。

私は聖の魔法に対する真摯な思いに惹かれたから。

勿論聖は私をコケにしたり。

アスカに流されたりしたけど。

でも私はそんなこと関係なかった。

会った時からずっと好きで。

でも男だから歯止めがかかって。

良かったのかもしれない。

っと思う。

誰にだって愛しすぎて憎い感情は持つてると思う。

だけど普通は理性が働いて手はかけない。

そう思うだけ。

感情だけで罰せられるなら私も罰せられるかもしれないけど。

「…日下のお兄さんを殺して。」

あなたには何が残ったんだ？
優越感？自己満足感？

あなたが手をかけたおかげで。

日下のお兄さんは永遠にあなたのものにはならないのが決定的になっただけじゃないのか？」

私は言いたかった。

そんな事で人の命を軽々しく奪ってほしくない。

「エレノア。」

日下が呟いた。

「…俺の思いはどうなるの？」

香澄に対する日下の真摯な思いは届いてない。

だけど日下の思いのお陰で。

私はこの香澄のたくらみに気づいたんだ。

「…どうしてよっ！！！」

どうして私じゃだめなの？

どうして…好きな人もいないのに私じゃだめなの？」

香澄は泣きじゃくった。

「それはあなたの思いが穢れてるから日下のお兄さんはそれに気づいたんだろう？」

「穢れてるって？」

「人を蹴落とそうとする思いなんか誰だって気づくさ。

あなたがMRもMCも使えるってきつと日下のお兄さんは気付いてて。

洗脳されたとしても心には届かないって判ったんじゃないのか？

あなたには。」

私は悔しくて。

同じ魔法を使える身としてそんなふうには人の心操ったとしても。

意味はなくて。

苛まれるだけなのに。

「香澄さん。警察行こう？」

日下はそう言っつて。

私に頭を下げた。

香澄は黙って頷いた。

日下は香澄の背中を押した。

「…エレノアもついてきてくれる？」

…俺大丈夫だから。

日下の心の声が聞こえた。

悲しい結末 2

心が現代では病んでるから。

魔法がいつからか使えるようになったとしても、心が荒めばどうしようもない。

心は叫ぶ。

そんなことしても意味がないって。

精神を病む人にはそんな声がいちいち聞こえて、耳をふさぐから。

魔法なんか使えなかった昔は。

きつと人の気持ちを量るのに一生懸命で。

犯罪なんか思いつかない。

思いが届かなかったとしてもそれは運命だと諦めることだってできたはずで。

それを「忍耐」とか「理性」とか言う。

それが出来ない現代社会人は欲望のまま生きて。

多くの人を傷つけて。

それでも足りなくて。

犯罪に走る。

意味はないと気付いた時は遅くて。

もう立派な犯罪者になってしまう。

香澄はそのいい例だった。

きっかけは何か判らないけど。

何かがあつて魔法が使えるようになって。

きつと神さまになつたみたいな錯覚を起こして。

何だつて出来て何だつて思い通りになると思い込んだ。

唯一思い通りにならなかつたのは好きな人　　日下の兄貴だつた。

MRかけてもMCかけても思い通りにならなくて。

結果悲惨なことになってしまった。

私は警察で。

香澄の弁明はしないけど。

魔法を使えるのってどうかと思うと提唱した。

日下は香澄を警察に託した後。

私に言った。

「…エレノアにはお礼も言つてなかつた。

ありがとう。」

「…これからどうするんだ？」

私は聞いたんだ。

だつて日下は香澄を助けたくて白療養士になりたかつたわけで。

香澄が捕まつた今。

多分魔法なんか見たくないんじゃないかと思つて。

「…これから？」

「そう。これから。」

「…まだ考えられないよ。いろんなことが一気に解決しちゃつて。考えがまとまらない。」

「…言おうと思ってたんだけど。」

私は日下に告げる。

「…無理に魔法習得しなくても。」

お前なら魔法なしで生きていけると思うんだけど？

それにヒーリングマスターしようと思っただらきつと1年はかかると思うし。

奨学生で3ヶ月未満なら確か奨学金返さないで良かったんじゃないかな
かったっけ？

っと思つて。」

私は日下に抱き寄せられた。

「ちよっ！！日下～～」（怒）

「なあ。エレノア。」

俺の事弟子にする気無い？

「は～～？」

「俺用心棒ぐらいにはなるよ？」

何せエレノアってば色気振り撒きすぎだから聖さんがいないとき
とか危なっかしくつて。」

「～～～っ（恥）

私は男だ！！何回言ったら判る？」

「だつて～～～。さっきの警官だつてヤラシイ目つきでエレノア見
てたし。」

俺心配なんだよね～～？

もし俺がここで奨学生降りたとするじゃん？

そしたらまた別の奴がエレノアの生徒としてくるでしょ？

そいつにエレノア確実に食われるよ？

警戒心なしのウサギみたいなもんだし。」

「~~~~っつ (怒)

じゃあお前のこの手は何だ？セクハラ野郎。」

「だから~~~~。俺だとキス止まりだったこと。

俺何回も言うけど男色じゃないから。

でも他の奴は違うよ？

きつとエレノアなんか会ったその日にやられるね。

近頃の奴男とかあんまり関係ないし。」

「∴関係ないって？

関係大有りだろうが！！！！

禁忌だぞ！！！！」

「だから今その禁忌犯してもエレノアとやりたい奴結構いるって。

こんな色っぽいのに。」

「~~~~ (怒)

お前ら目がおかし過ぎ！！！！」

私は頭がおかしくなりそうぞ。

聖も何だかそんなことは言ってたけどとは思うものの。

実際日下は元の世界に帰った方がいいと思うぞ。

「∴だけど実際日下はヒーリング使えるようになるか判らないのに

ホントに私のところに居るのか？」

「だから言ってるんじゃない？

用心棒だって。」

「∴あほ。

お前のこれから先長い人生だぞ？

真剣に考える。」

ギョツと腕に力が込められて。

「…日下。苦しい〜〜。」

私がそう言つと。

日下は。

「エレノア。お願い。

ヒーリング教えて？

俺本気だから。白療養士になりたいから。」

「…だけど奨学生枠外れるぞ？

確実に。」

「バイトもするし稼ぐから。

お願い。」

…私は根負けして。

頷いた。

日下の表情からは感情が読めなかった。

ただ私が頷いたのを見てまつ毛が震えたのだけが見えたんだ。

日下はきつと私が問う前に決めてたんだと思う。

それから香澄の裁判やらなんやらいっぱいあって。

もちろん有罪で。

それと並行させて日下は魔法書を読み漁った。

それは何かに取りつかれたかのように。

昼も夜も片時も休まず。

休むのは眠る直前のほんの30分ぐらいで。

私にじゃれつくことも殆ど無くなった。

「日下？

大丈夫か？」

私は根詰めすぎるのもどうかと思って。

聞いても日下は。

「だって俺才能ないからどうにかしないとヒーリングマスター無理
じゃん？」

そう言うんだ。

魔力習得の速度とか。

そんなの関係ないって言っても日下は焦っていた。

焦るのも判るんだけど。

体を壊さないかが心配だったんだ。

ある日私の予感は的中して。

日下が赤い顔で魔法書を読んでいるときに気づいた。

「日下。ちょっと。」

私は思わず声をかけて。

「大丈夫。」だという日下の手を押しつけて。額に触つたらものすごく熱くて。

一般人が無理をすると高熱は避けられないから。私は思わず怒鳴つたんだ。

「お前は何を考えてる??？」

焦つても仕方がないだろうが!!!

一生懸命やればいいって何回言つたら判る??？」

そして日下の手の魔法書を取り上げたんだ。

「エレノア!!!なにすっ!!!」

「何するじゃない!!!」

今日は終わりだ!!!寝ろ!!!バカ!!!」

私が眉根を上げ声を荒げると。

日下は掴みかかってきた。

「エレノア!!!何で邪魔するんだよ!!!」

「何で??？」

私は掴まれた手を振り払おうとしてもがいた。

「そんなことも判らないのか？」

そのままやっても意味はないから言ってるんだ。

熱を出しながらやっても絶対に魔法習得はできないって。」

「そんな判らないでしょうが!!!」

「判るんだよ!!!」
聖だつて初めのころは熱を出して。
知恵熱みたいなもんだけど結構治りは遅かつたんだ。
焦れば焦るほど上手くいかないんだ。」

私は日下の手を振り払って。

「だから寝ろ!!!」

「ちゃんと休むんだ。」

そう言った。

「…極限まで疲れないと眠れないんだよ。」

日下はそう呟いた。

「…はあ?」

私は相手にしないで日下が呼んでた魔法書をしまいに引っさかして思った。
「たら。」

日下に腕をつかまれ引き寄せられた。

「ちよっ!!!日下!!!」

私が顔を上げるとキスされた。

「んっ!!!」

久々のキスは深くて。

「…どうしたんだよ。日下。」

私は息も絶え絶えのまま聞いたんだ。

発情期 2

「…ごめん。エレノア。」

「俺発情期みたいだ。」

そう呟いた日下は痛そうな笑みを浮かべた。

太陽のような微笑みをもう浮かべなくなっていた。

それはきつと子供じゃなくなった証拠。

大人になった証拠だった。

「…何で謝る？」

「良かったじゃないか。他に好きな人見つければ。」

「…違うんだ。」

「…？」

「…ごめん。俺エレノア好きになったみたいで。」

「…嘘だろう？」

青天の霹靂とはまさにこのことで。

「嘘じゃない。」

「今ならきつと抱けるよ。」

そう真剣に言うから。

私はそれはそれは恐ろしくなって。

ザツと血の気が自分が引くのが判った。

稀に聞いたことがある。

一般人が魔法を習得する場合。

いろんな弊害が起こるって。

例えば嗜好が変わるとか。
趣味も変わるとか。
好きなものを嫌いになるとか。

私の場合はそれはなかった。

聖もそれはなかった。

元々潜在的に白魔法を持つてるから。

でも日下は違うから。

一般人だから。

「…日下。私はどうすればいい？」

私は努めて冷静に聞いたんだ。

「…抱かせて？」

「それは却下。

それ以外は？」

「…エレノアは何でそんなに頑なに操守なの？」

「…私はこれでも随分聖とお前に慣らされたと思うけど？」

昔はキスだつてこんなに容易くすることなんてなかったから。」

「だつてエレノア。」

「聖さんだつて業を濁してるでしょう？」

「聖は…確かに私を抱こうとしたけど。」

でも私が懇願したんだ。」

本当はあのとき。

皇帝を倒したあのとき。

聖は私に言ったんだ。

「エレノアの事抱くから。」と。

それを私が懇願して止めてもらってそれが保留になってるんだ。

「私が極度に怖がるからきつと聖は無理強いしなかったんだと思う。」

「俺なら無理強いするな。絶対。」

日下はそう言っって苦笑いを浮かべた。

「じゃあ。俺の事気持ち悪くないのなら手をつないで?。」

「...?ああ。」

ガシツと手をつなぐ。

日下は高熱だと思いながら私は手を握った。

「ホントこういうとき男だもんな。エレノアは。」

苦笑いする日下に私は真剣なまなざしを送る。

「手をつないでも良くはならないだろう?。」

「体熱いけど収まるかも。」

「判った。お前が寝付くまでここにいてやるから寝ろ。」

私が手を引いて日下をベッドまで連れていく。

何だかそういう状況に慣れ切ってる自分にも驚きだったし。

だけどそれはそこまで。

ベッドに着くと私は引き倒された。

「なっ!」

「コラッ!」ついていてやるとは言ったけど一緒に寝てやるとは言

ってないぞ!!」

「…エレノア。暴れないで。

暴れると酷くしちやいそうになるよ。」

「っ!!!」

お前また子供の魔法唱えるぞ!!!」

私がそう言つと。

「…それだけはマジ勘弁。」

そう言つた日下は私を上から抱きしめた。

「重い〜〜。」

「苦しい〜〜。」

そしてキスを受けた。

熱い熱いキス。

そして日下の寝息が聞こえた。

極限まで疲れないと眠れないと言つてた日下は。

私が判らないように唱えた魔法で眠つた。

私は日下の下から抜け出して。

呼吸を整える。

日下は発情期だと言つていた。

私はそうは思えなくて。

思案した長い夜が始まつた。

魔法の弊害 1

魔法書にはいろんなことが書いてある。

ヒーリングだけでなく例えば魔法の言葉を唱えなくても念じるだけで思い通りにできるやり方だとか。

でもそれは明らかに「犯罪」で。

私だって出来るけどやり方は知ってるけどしないのが普通で。それを実践する奴は馬鹿だと思わない。

日下は何か勘違いしてるみたいで。

体が熱いのは熱があつて。

発情期じゃない。

発情期は人間には一般的に存在しないから。つていうか。

好きな人に触れたい感じたい。

そう思うのは悪いことじゃない。

だけど度を過ぎると「犯罪」になる。

合意じゃないのは罪だ。

それは香澄がやってることと何ら変わりはない。

私がつたまたま今はまだ魔力が日下より上で。

日下が気づかないように魔法も唱えられるけど。

それがなかったらと思うとゾツとする。

多分その違いなんだと思う。

聖は私に無理強いはしない。

それが確認できるし確証できたから。
聖は私に望んだのはいつでも傍に居ること。

距離じゃなくて心が。
多分そういうことなんだと思う。
人を好きだということは。

だから私は自分に出来る精一杯の思いで。
キスを送る。

聖が嫌がるまで。
聖に本当に共に歩いていく人が見つかるまで。

肉体関係までなければ取り返しがつくから。
行為自体まで聖が悔やむのは私は不本意だから。
私が望んでることを聖は聞いたら怒るだろうけど。
だけど仕方ないんだ。

私にはこういう愛し方しかできないから。

私は日下を見てため息が出た。
魔法にこいつが使われることがなければいいけど。

一般人が魔法を習得するのは何と難しいことだろう。
そう思いながら。

魔法の弊害 2

「おはよう。日下。」

私は日下が起きる朝まで見守っていた。

私にはそれしかできないしそれしかすることもないから。

日下の寝顔は安らかだった。

熱があるなんてウソみたいに。

「…おはよ。エレノア。」

バツが悪そうに瞳をあけ。

日下は私を見て。

「…怒ってる？エレノア？」

そう聞いた。

私は何だか笑えて。

「…いいや？だってお前は何もしなかったから。」

何かしたら怒るところだけ。」

「…ごめん。」

「まあ。別に日下に言われるように私は操守ってるし？」

でもそれについてお前に何か言われることはないだろう？

もし私が男を誘いまくって寝まくってそれでお前に迷惑が及んでるなら何か言われるのも判るけどな。

男連れ込むとかよそへ行けとか気持ち悪いだとか？

…そうじゃないんだからそれについていろいろ聞かれてもお前に関係ないだろうって思うだけなんだけど？」

「…確かにそうなんだけど。」

「まあ。お前も今日は熱があることだし？
魔法はお休みだ。
ゆっくり休め。」

そう言っただけで私は日下の額に手をやった。

「…魔法で熱って下がらないの？」

「ん？下がるけど？」

「じゃあエレノア。」

ヒーリングかけてよ。」

軽く言う日下に私はため息をついて。

「あほ。魔法はそんな大安売りするもんじゃない。
自然治癒力がそんなんじゃ退化してしまう。」

あくまで最終手段だっただけで言ってるだろうが。」

「ちえつ。エレノアのケチ。」

「ケチとはなんだ。ケチとは。」

人が完徹でタオル変えて冷やしてやったのに？」

「嘘。エレノア。」

そんなこと俺にしてくれたの？」

「…そんなに驚くことか？」

「だってエレノア。」

優しいじゃん？俺お前の事抱きたいって言ったのに？
ってことは少し期待しても？」

「…あほ。期待なんかするな。」

私がベシッと日下の頭をたたくと。

「…でも俺。」

少しわかった気がした。

人を好きだっっていうの。

エレノアの事好きになっって気づいた。

エレノアが聖さんを好きでエレノアが聖さんのことホント大好きで。

心で大好きってよく判った。

体じゃない。精神的に満たされるって言うの？

一緒にいるだけで幸せって少しだけ判った気がした。」

そう言っって日下は私の手をつかみ。

「そう。こんな風に引き寄せるだけで良いって。

香澄さんにも多分この気持だった。」

私は聞いたんだ。

「…お前は香澄さんを諦めるのか？

そして代わりのように私に好きだと言っって？」

日下は私を見つめた。

「私は…日下が香澄さんを好きだっって聞いて応援してたんだ。

何があっただとしてもお前はきつと香澄さんを愛していけるっって。」

「…罪を償いにムシヨに入った人を？」

「…それでもお兄さんを殺した人だから難しいかもしれないけど。

理屈じゃないと思うんだ。好きになっった理由って。

ちゃんと償っって前を向いて生きていくのに支えは必要じゃないかっって思うんだが。

例え香澄さんがお兄さんを好きだっただとしても。

今は心細くて。

もう多分魔法にも頼らないんじゃないかっって思うんだけど？」

「…うちの母親にも危害加えた人だぞ？」

「…じゃあ聞くけど本当にもう諦めて私を好きだっって言っうのか？」

「私は夢物語を信じてるわけじゃないけど。」

日下見てたら心が痛むんだ。

そんな悲しそうな表情で私を好きだって言われても信じられないし。

前に香澄さんを好きだって言ってた日下の表情が本物に見えたか

ら。

「

私は日下を抱きしめた。

「お前。口で私を好きだつて言いながら心で違つて言つてんだよ。

代わりじゃ満たされないつて言つてんだよ。

だから焦つて熱を出して。

でも私は良かったと思う。

お前がそのまま突つ走つたら私はきつと止められないで終わるだらうから。」

日下は私にキスをした。

深い深いキス。

「…惜しいよなあ。エレノア。

女みたいに綺麗でいい香りがするのに。

もつたいたい。」

「何がもつたいたいなんだ。何が。」

「…まあいろいろと？」

この細い腰とか？」

「黙れ。セクハラ野郎。」

日下は私を抱きしめていた手を離し。

「ああ。今日は魔法休みか〜。」

そう言つて伸びをした。

そしてニツと笑って。

いつもの太陽のような笑みに近い笑みを浮かべ。

「エレノア 今日天気も良いからデートしよう!!」
そう言った。

「...いや私は...」

そこまで拒否る言葉を言おうとしたら遮られ。

「俺に此処で襲われるのと外でデートするのとどっちが良い？」

俺は襲うのでOKだけど？」

日下はオスの表情を一瞬浮かべた。

私は両手を上げて降参する。

「わかった。行くから。」

我ながら情けないけど。

怖いんだから仕方がない。

ホントは寝たかったのに... (泣)
そう思ってもあとの祭りだった。

パーク 1

私は基本はオフのときはいつもの聖に評判の悪い服じゃなくて。単なる黒いシャツにジーンズという普通の男がやる格好をする。

神官には見えない服装ならなんだかんだと言われることもないから。でも私は基本長い髪をしてるから邪魔で。うっすら切っ飛ばしておうかと思う時もある。

長いには理由があつて。

長い髪に魔力を蓄えられることもあるからで。

だから別に世界は平和になったのだから切っても良かったんだ。

「…エレノア。男装の女に見えるって。」

そう呟く日下はホストみたいな格好をしていて。

「…意味が判らん。男装も何も私は男だ。

っつかお前。寄るな。

気持ち悪い。ホストみたいな格好するなら私は行かない。」

「あれえ？エレノア。

何で？もしかして照れてる？」

「…同伴の人みたいに見えるだろうが！！

私は不本意だ。」

「…同伴つてあの売りやつてる人の？

何？エレノア。行ったことあんの？」

「いや。聞いたことがあるだけ。」

「へえ？俺はホストみたいな格好でエレノアを誘惑するのが良いけ

ど？

しかもエレノアは俺のだけ〜って町を自慢して歩けるじゃん？」

「……（脱力）」

勝手にしろ。」

…何か口を開くのも疲れてしまって。
どうでもよくなってしまった。

「ところでどこに行くんだ？」

聞いてみたら。

日下は言ったんだ。

「パーク。」

「…ってあの新しく出来た遊園地のことか？」

「うん。チビが行きたいって言ってて約束なかなか守れなくてさっき誘ったところだったんだ。」

「…チビも来るのか？（脱力）」

「ああ。エレノア。気にしてんの？」

チビがエレノアお嫁さんにするって言ってたのを。」

「……………」

「たぶん大丈夫だと思うけど？」

何かさっき電話で話したら延々と近所の女の子の話してたから。

チビは移ろいやすいもんだし。」

「…そうなのか？」

私はもう迫られるのはごめんだ。」

「ふふふふ。エレノア。」

みんなに迫られてるもんな。俺はじめとして。」

「……………」

「まあでも多分。」

エレノアの前開きのシャツ見たらチビは間違いなく飛びついて離れないと思うよ?」

「……………?」

「前開きの服のエレノアなんか希少すぎて絶対顔埋めるよな。」

「っ!!!変態。」

「変態って仕方ないじゃん?

チビも男だ。絶対反応するって。」

「じゃあ。着替える。」

私はゲンなりしながら着替えに立とうとしたら。目下に止められ。

「良いつて。俺が守ってやる。」

そう自信満々に言われ。

流されたままパークとやらに向かったんだ。

パーク 2

「っってお前。」

「熱は大丈夫なのか？」

私は腕を引かれながら聞いたんだ。

「うっくっくん。少し熱いけど。」

ほらっとかがんで私の額に日下は自分の額をこつんと付けた。

「…大丈夫なのか？」

私が日下を見上げて聞くと。

「でもこれが焦ってる熱なら少し休めば回復するんだろ？」

それなら遊ばないと損じゃない？」

せっかくもらった休みなのに。」

「…無理すんなよ？」

「判ってるって。」

エレノアってば心配性なんだから。」

そう言っつて日下は離れた。

私はキスされるかもと構えていたものだからなんだか脱力してこんな慣らされてしまったのかと愕然としてしまった。

私はそれを打ち消すように日下に言ったんだ。

「…ホント久しぶりだ。」

外に出るの。

「電車なんかここ最近乗ってないし。」

「ああそっか。」

エレノアは瞬間移動するから？」

「…まあ。そんなとこだ。」

「俺ね。あそこにいるといつまで経っても魔法使えないクズみたいだけど。」

外に出たら結構生きていけるんだよ?」

「あははは。それが普通だもんな。」

私はそれを聞いてどんなにか日下にとって魔法習得が難しいかを判った気がした。

「…日下。」

「何?」

「外に出て魔法やめても大丈夫だぞ?」

私はいたたまれなくて。

だって普通に生きていける一般人に酷なことを言ってるような自分が嫌で。

電車が来る。

私は日下に手を引かれて電車に乗る。

「…何でそういうこといっかなあ?」

エレノアは。」

私に日下はため息をついて。

「俺。魔法使えるようになりたいんだよ?」

何回言ったら判ってくれるんだ?」

「…だって。」

何か酷なこと言ってるなって思っ

外の方が日下は断然楽しそうだし。」

日下は電車が揺れて私に覆いかぶさるように立った。

「…だってそれは仕方ないでしょ?」

俺20年間魔法知らないで生きてきたんだよ？

全然不便じゃなかったしむしろ今の方が制約があって苦しいよ。」

「…だったら今なら。」

「違うでしょ？エレノア。」

俺は苦しくてもエレノアに魔法を習うことを選んだんだ。

途中で投げ出したりなんかしない。

習得するまであきらめるもんか。」

「…そうか？」

「信じてないだろう？」

「…うん。」

日下は私に覆いかぶさったままキスをした。

「ちよっ！！こんなところで。」

「だってしてほしそうだったしvvv」

「あほ！！！！」

私は日下を押しつけた。

「エレノア。あんま暴れない方が良いよ？

注目の的になるって。

それだけでなくもこんだけ色気振り撒くってるんだし。」

日下はさらに電車の振動で私に覆いかぶさる。

「ちよっ！！！！日下！！！！」

不埒な日下の手が腰に回ってきたところをたたき落とす。

「変態！！スケベ！！！！」

「エレノア。そんなこと言つと本当に襲つよ？」

低い声で日下は私の耳元で囁いた。

私は心構えがなくてうろたえて。

声が出なかった。

隙をついて日下が私を引き寄せせる。

「俺痴漢からエレノア守ってやるから。
てめえが痴漢だろうが！！！」

思ったけど言わないでおいた。

怖すぎるから。

そしてパークに着いたんだ。

パーク 3

「エレノア……」

パークの入り口に電車がついたとたん。

私はでかい男に抱きつかれた。

驚きのあまり声が出なくて。

それをクスクス横に立ってる日下は笑った。

「…これ。あのチビだよ。」

日下はそう言っつて。

でかい男を私から引きはがした。

「おいおい。エレノア窒息するぞ。」

そんな加減なしで抱きしめると。」

つてか目の前の男は。

日下よりは少し背は低いけど。

私よりはずつとでかくて。

「だってエレノア相変わらず綺麗でぎゅゅとしたいんだもん。」

私が恐れおののいていると。

そう言っつた。

そして我に返つた私は。

日下に言っつたんだ。

「…この間会つた時はチビはチビだったじゃん？」

そう言っつと日下は私に信じられないことを言っつたんだ。

「こいつ。早く大きくなりたいって願っつたって。」

エレノアがヒーリングかけてくれたときに魔法が少しかかったんじゃないのか？

俺も少しびっくりしたけど魔法なら納得かなって。」

不埒なチビの手は私の腰に回り私はゾツとした。

「この間も思ってたけどほっそい腰」

エレノアそんなんで女抱けんの？」

言うことも成人の男と変わらず。

聞いたことはあつたけど実際に間接的に魔法がかかって成長が早まるだなんて目を疑ったんだ。

「日下（怒）」

「つてか俺に怒られても困るんですけど。」

「…だ〜〜っ（涙）手を離せ〜〜（涙）」

「だってエレノアが悪いんだよ？」

兄ちゃんに何回もキスさせて。

僕の嫉妬心は最高値。」

私はパークの前で日下兄弟にまわりつかれ。（涙）
失態を晒しまくった。

チビが私の前開きの服のボタンを外そうとしてきたから。

私は流石に青くなって。

「頼むから止めてくれ〜〜（泣）」

そう懇願したんだ。

そして日下からの妥協案は。

観覧車に乗ることだったんだ。

私が高いところ苦手なの知ってるくせににやりと笑って。

日下は私の手を引っ張った。

チビは相変わらず私の腰に手を回し。

ある意味羽交い絞めに近い状態で観覧車に乗ったんだ。

男3人で何が楽しいんだ!!!

と言いたかったけど言える雰囲気じゃなかったし言ったらまたエライ目に遭いそうだったから

何も言わなかったんだ。

私の人生はセクハラだらけだ(涙)

そう思いながら観覧車は上へ上がっていく。

…無情だ。非情だ。

聖~~~~~助けてくれ~~~~~(涙)

僕たちの町 1

観覧車の中は比較的快適で。

私は昔から高所恐怖症なもんで。

それは魔法では治らず。

当たり前だけど。

外を見ると怖くて。

私はじっと耐えてた。

空調は良かったものだから快適と言えるとは思っただけど。

チビは私を強引に窓の近くに連れて行って。

言うんだ。

「ほら。エレノア。

あれが僕たちの町だよ。」

湖畔を囲うように出来た町は私が一目ぼれした環境だった。

でも私には地獄のようにしか映らず。

「離せ〜〜(涙)」

と散々暴れたら。

頂上で観覧車は止まりアナウンスが流れたんだ。

「ただいまから30分間静止いたします。

皆さまどうか思い出作りにどうぞ〜」。

「ちよっ!?!うそだろう???」

私は思わず日下を見たんだ。

日下はにやりと笑って。

「ちなみに観覧車の中では魔法は禁止だからな。」

日下は私の逃げ道をふさぐ。

確かに観覧車の中は魔法は無効になって。

確かにそうなんだけど。

何か日下が言うつとヤラしくて。

なんか裏があるんじゃないかって思う。

「エレノア〜〜vvv」

私はチビに抱きしめられて息も絶え絶え。

頼みの日下は私の腕を拘束しようとしている。

「日下まで〜〜（怒）」

何で私がこんな目に遭わなきゃならない?？」

私はチビに観覧車の席に押し倒され。

ホント泣けてくるぐらい怖くて。

「ホントやだつて（泣）」

チビは構わずキスしてくる。

それも深い深いやつ。

手加減はチビだから無い。

貪るように私の吐息と共にからめ取る。

気づけば前のボタンも2個か3個が取られていた。

そしてペンダントに行きついて。

「これは何?」

チビのくせに怖い声を出した。

「つつ何が???」

私は息も絶え絶えのまま。

「これ。」

私はそれを見て。

「…聖に貰ったやつだ。」

渋々答えた。

「何? エレノア。」

「こんな女でもなくせにしてるの?」

「ああ? そう…だけど?」

前からはチビが私にのしかかり。

後ろからは日下が不埒な動きをしてきて。

ホントに泣きたくなかった。

「俊弥。妬けるだろ?」

日下が要らないこと言うつから。

チビはチビのくせに。

私の首筋を噛んできた。

「痛い…痛い。」

痛いって!!!!」

ホント私は半泣きで。

日下は私の後ろから抱きこんだ腕を掴んで。

口づけてきて。

もう何だか強姦されてるような気分で。

「2人がかりでこんな…」

卑怯者… (涙)

変態~~~~(泣)「

私はそう叫ぶしかなかった。

「エレノアが悪いんだよ。

こんな色気振り撒いてるから。」

変態で結構とチビはさらに私のはだけたシャツから手を入れようと
してきて。

流石に私の泣きが効いたのか。

日下が止めに入ったんだ。

「おい。俊弥。

その辺にしとかなないとホントにエレノア泣くぞ。

それ以上したらきつとエレノア自殺するの選ぶかも？

何しる潔癖だから。」

私が許せる範囲を超えたらきつと。

そう日下は私の後ろで不埒な動きをしながら言ったんだ。

お前だつて充分に!!!

私はそう言いたかつたけど。

チビは仕方なく私のシャツに手を入れようとしていたのを出して。

私の首筋を舐めてきた。

「ひゃっつ!!」

「…これぐらいはエレノアだつて許してくれるよな？」

チビはそう言つてにやりと笑つた。

日下はチビの手が離れたのを見て。

「さあ。俺エレノアの貞操は守つたからキスしてもらおう。」

そう言って私の首を無理やり上を向かせて深い深いキスをしてきた。
それから観覧車が動き出すまでずっと私は代わる代わるキスを受けていたんだ。（涙）

僕たちの町 2

観覧車から降りる頃には私は何だか惨めで見た目はチビと日下によって直されたけど。でも何だか本当に犯された気分です。

遊ぶ気分にもなれなかった。

「エレノア……。今度はどこに行く？」

チビが聞いてきた。

「…私はもう帰る。」

チビと日下で遊んで来い。

門限も今日は不問にしといてやるから。」

私は最低ラインの妥協案を出して。帰ろうと思った。

こんなことなら初めから来なければ良かったと思う。

「…エレノア。それ酷くない？」

日下は眉根を寄せてそう言う。

「…酷いってどつちが？」

お前とチビの方が酷いだろうが！！

私はお前たちの道具じゃない！！！！」

だって初めての感覚が怖くて。

キスされて感じるなんて最低だ。

しかも相手が聖じゃないところに私は愕然としたんだ。

私が好きなのは聖1人なのに。

体が聖を裏切りそうになるだなんて自分が許せないし信じられない。自分が息もつけない深いキスに弱いだなんて初めて知った。

その時だった。

遠くに手をつないだカップルが見えて。

その男の方が聖で。

楽しそうに笑ってるのが見えたんだ。

パークは人が1番今のところ集うところだから。当たり前なんだけど。

…その光景を見て私はショックだったんだ。

聖を見間違っはすもなく。

ただその光景が妙にしっくりきて。

ああ。そうなんだって何となく納得が出来て。気づけば泣いてたんだ。

「わっ！！エレノア。泣いてんの？」

驚かれるのは当たり前で。

日下は泣く私を見て。

「判った。今日はこれぐらいで勘弁してやるよ。

チビと遊ぶわ。今日は。」

そう言って日下はチビを連れて行ってしまった。

私は電車に揺られたくて瞬間移動を使わずに駅に向かったんだ。

女の子と歩く聖の様子はやっぱり自然で。

当たり前だけど絵になった。

それは女の子が綺麗だからとかじゃなくて。

私と歩く聖の姿が不自然で。

アスカの時もそうだったけど。
聖はモテるから。

もう多分手をつなぐ以上の事をしてるだろうって容易に想像がつく。

焼き餅を焼く自分が嫌で。

何とか忘れたくて。

1時間弱かかって湖畔を望む部屋に着くと。

滅多に飲まない酒を煽ったんだ。

じゃないと眠れない。

女の子と歩く聖の姿を消したくて。

そして情けなくて大泣きしたんだ。

バカな私は大切なものをいつも。

いつも指の間から逃がしてしまう。

それはいつもの悪い癖で。

だから本人に確かめもせず。

私は意固地に連絡も取らなくなった。

ペンダントも外すことにした。

それでも満たされないのは心が汚れてる証拠。

スランプ 1

本格的におかしいと感じたのは。

翌日魔法の講義を日下にしてから。

いつものように力を貸して日下の手から炎を起こそうとした時のことだった。

いつもなら熱くない安全な青い炎が生まれるのに。

日下の手のひらから起こったその炎は赤くて。

日下に火傷をさせてしまうところだった。

「あつっ!!!」

日下は私を見て。

私はそんな自分が信じられなくて。

「ごめっ!!!」

辛うじてそう言うので。

炎は消えた。

「どうしたんだ？エレノア？」

聞かれても判らなくて。

私は。

自分の手を見て。

異変を感じた。

私の魔法が犯されてきてると。

それは心が穏やかじゃない証拠。

黒魔法に近くなってきてることだった。

何でか判らなくて。

「ごめっ！！日下。

痛かったか？」

私は精いっぱい日下にヒーリングをかけようとした。ただ無理だった。

ヒーリングすらできなくなっていた。

私の只ならぬ様子を見て日下は言ったんだ。

「俺。聖さん呼んでくる。」

「呼ぶな！！！」

私は遮るように大きい声で。

そう言う日下に怒鳴った。

「だって一大事じゃん？」

付き合ってるんだから当たり前で。」

至極当然の事を日下は言うけど。

「…頼むから呼ぶな。」

私は聖に知られたくなかった。

講師なのにこのザマで。

「だってエレノア？」

それぐらい迷惑かけたって付き合ってるんだから当たり前でしょ？」

「…違うんだ。日下。

私自身の問題なんだ。

聖に言っても言わなくても好転しないんだ。

だから要らない心配かけたくないんだ。」

半分ホントで半分ウソのことを。
さも尤もらしく私は演技した。
どうか日下が騙されてくれますように。
そう思いながら。

「元々スランプって誰にでも起こり得ることだ。
私の場合初めてだからちょっと驚いたんだけど。」
ホントはかなり重症で。
今まで類を見ないぐらいのきつとスランプで。

だけどそれを日下に判ってもらおうとは思わないし。
ましてや聖に告げる気もなかった。

「…そうなの？」

「ああ。そうだ。」

私は震える心を覆い隠しながら。
次の言葉を紡いだんだ。

「魔法のことなんだけど。」

私がスランプの時期に入った以上日下に魔法を教えるのは無理だ
から。

誰か代わりの人に頼んどくから。

もちろん部屋もそいつに頼んどくから。」

「…それは実質パートナー解消ってこと？」

私は息をのんで。

「…いいや。」

何でもないことのように打ち消してみた。
震える声を何とか出して。

「いいや。私がスランプが終わるまで。
いつ終わるか判らないからお前に迷惑かけたくないんだ。」
私は笑ったつもりだった。

「迷惑つて？」

日下はさらに私に問う。

「…あとお前がいる期間は3ヶ月。」

その間にスランプが終わる保証はないんだ。

だから一時的にパートナー解消して私は私でお前はお前で魔法について取り組もうって言ってるんだ。」

「エレノア！！俺嫌だよ。」

エレノアに魔法教えてもらうって約束したじゃないか。」

「…わがまま言っただけ私を困らせないでくれ。頼むから。」

私は一方的に話を終わらせて。

部屋を出たんだ。

スランプに陥った原因は。

きつと私の汚れた心。

嫉妬した心にやられたんだろって思う。

こんなことなら人を好きになるんじゃないかった。

そう思う。

心が苦しくて痛くて。

魔法すら使えないんじゃないじゃ全く私は生きてる意味すら無くしてしまっ。

そして気づく。

私は自分の運命すら恨んでることに。

スランプ 2

愛されてる自信なんか元々なかったし。
いつ嫌われても良いように私は覚悟してたって言いながら。

ホントは傲慢で愛を紡いでくれる聖が自分を裏切るわけがないって
心のどこかで思っていて。

昨日見た光景が妙にクリアで。

お似合いだと言いながら嫉妬してる自分に腹が立って。

ぐちゃぐちゃで。

禁忌だと言いながら愛されたいと願ってる自分に愕然としたんだ。

こんなドロドロした感情を聖にも目下にも知られなくなかった。

私は食堂に入り。

同期の結城に声をかけたんだ。

「…エレノア？」

結城とは話したことも殆ど無かったし。

ただ同期だと言うだけで。

でもさつき事務に確認したところ。

私と同期で最近手すきになった奴は結城しかいなくて。

「悪いんだけど。結城。

私の教え子引き継いでくれないか？」

用件だけ言って問う。

「ちよつと何なわけ？エレノア。

急に話しかけてきたと思ったら用件のみ？」

結城は昔からまじめで。
私に似た教え方をする講師で。
私ほど融通が利かなくなくて。
フランクで。
彼女とはもう籍を入れたと聞いた。

「…どうしたんだ？
迫られて困ったから代わってくれとか？」
結城は軽口をたたく。
でも私にはそれに対応する余裕はなくて。
私は首を振り。

「…そんなことでこんなこと言わない。
どれだけ迷惑がかかるか判ってるつもりだ。」
だって教え子が「卒業」したら基本的にオフに入れるから。
だから私は心苦しかったけど。
でも頼める人他にいなかったから。

「彼女さんにも私から謝るから。一緒に謝るから。
せつかくのオフに入れるのに重々悪いと判ってるから。」
「どうしたんだ？エレノア？
顔色悪いぞ？」

「…スランプなんだ。
いつどうなるか判らないくらい深刻なんだ。
だから。」

私が縋るようにそう言つと。
結城は初めて私を見て。
「…どんな状態なんだ？」

そう聞いてきた。

「たぶんもう今の状態はヒーリングすら使えない状態だ。はっ！！役立たずも良いところだろ？」

私は自嘲の笑みを浮かべて。

結城を見た。

「それでお前はこれからどうするんだ？」

「私は多分今の部屋も出ていくことになると思う。役立たずは要らないからな。」

「…聖は？」

お前がそんな状態のこと知ってんのか？」

「ああ。お前に引き継ぎがちゃんとできたらちゃんと言っつもりだ。」

…嘘をついた。

「…美香に言わないと。」

結城は私の前で携帯を取り出し彼女と話をつけ始めた。

私はその光景すら羨ましくて妬ましくて。

「…ああ。しばらく会いたくないって言われた。」

電話を切って結城は私にそう言っつて。

「でも仲間の一大事には助け合わないとな？」

そう言っつてくれたんだ。

「俺がスランプの時エレノア絶対助けてくれよ？」

結城はそう言っつて。

私に笑いかけてくれた。

私は結城に礼を言って別れたんだ。
もう多分。

これは予感なんだけど。

私は魔法を使えなくなるだろうって思う。

それは嫉妬心が消えるわけがないから。

精神状態が良くなることだって多分ないだろうし。

自分の事はやっぱりわかるんだ。

弱点も判るし自分がいかに自己中かも判ってるつもりだから。

聖には告げない。

私は固く誓って部屋を明け渡す準備をしたんだ。

スランプ 3

「こちら。結城実さん。」

私の同期で私が頼んで今日から講師になってもらおう人だ。

これは日下聖也。私の教え子だったやつ。」

それじゃよろしくと私は消えたんだ。

日下と結城は微妙な空気の中私には構わず。

魔法の講義に入ったから私は安心して。

自分の荷物をまとめる。

魔法書を少しと着替えと。

片手で持てるぐらいのカバンにホントちょっとで。

私の荷物はそれだけだった。

魔法を失くした私には事務から容赦ない指令が下りてきた。

部屋からすぐに出て行け。

魔法が戻り次第連絡を待つと。

情け容赦のないその事務のやり方に私は昔から反発してきたのに。

今回だけは有難くて。

冷たいそのやり方に何も聞かれない嬉しさが勝り。

事務から出ると聖が待ってた。

女の子と一緒に。

「エレノア。」

久しぶりに聞く聖の声に心は縋りそうになるけど。

私は敢えて明るく振る舞った。

「ああ。聖。

ちょうど良かった。

私もお前に用があったんだ。」

「何？」

「ごめんな。スランプの時期に入っちゃって魔法使える人と極力接触しない方が良くもんだから連絡しなくて。」

…上手く言えた気がした。

「えっと多分。

スランプは伝染性はないんだけど。

やっぱり魔法使える人のそばにいるのは辛いから。

ごめん。また私のわがままで。

部屋決まったら連絡するから。」

連絡するから。

私はそう言って走り出した。

追いかけてこない聖の様子にイラつきながら。

生徒を放って来れるわけがないのに。

判っていないながら。

聖を試したんだ。

私のスランプの原因は自分で判ってたから。

魔法を侮ってはいないけれど。

聖を侮ったのは私。

愛されてる自信なんてないと言いながら。

愛されることが当たり前で。

きつと私は傲慢だった。

聖はもう私を裏切らないって高を括ってたんだ。

聖が連れてた女の子は可愛かった。

本当にお似合いで。

胸が討たれた。

だけど肉体関係結ばなくて良かったと。

それだけは後悔しないで済んだんだ。

心そのまま生きてらきつと後悔はどれだけしてもしきらないぐらいだ
と思うから。

私が必要以上に肉体関係を持つことに恐怖を持つことを。
今だけは誇れるような気がする。

テロリズム 1

スランプとは。

定義としてはいつもの能力が出せないこと。

心理状態が良くないこと。

誰かに必要とされたくてもされないこと。

魔法書には必ず初めにスランプのことが書かれてる。

それは誰にだって起こり得る必要な情報だったから。

私は瞬間移動さえ出来なくなっていたから仕方なく電車の切符を取った。

片道の1番高い切符。

多分もう戻って来れないから。

部屋はね。今度は町中の賑やかな所が良い。

そう思った。

1人でさびしいから。

行けるとこまで行ってみようって思った。

電車の中では一般人の方が多い。

私みたいに神官講師は珍しい。

その境目がどこかはよく判らないけど。

一般人は泣いて笑って毎日一生懸命生きていて。

いつか運命の人を見つけて結ばれて。

子供が生まれて。

年を重ねて。

白髪になっても初めの誓いは忘れない。

私はそんな生き方にあこがれてた。
魔法を使えると辛くて。

だけどね。だけど思い通りにならないのは魔法を使えても一般人でも一緒だった。

心だけは魔法では支配できないから。

カードマジシャンだった両親を持った私とアスカは。

魔法が使える環境が当たり前すぎて。

アスカは魔法を使える故に道を踏み間違い。

あのザマで。

私は私でこんななんだったらアスカと何にも変わらないって思えた。

それにこのままだと一般人よりも役立たずで。

それでも癒されたいと願うのはいけないことだろうか？

その時だった。

何かが爆発した音がしたんだ。

それは世間一般に言うテロってやつ。

近頃は頭がおかしい奴が一般人にも増えたって。

事務の奴が嘆いていたのを思い出す。

聞いてはいたけど魔法を使えたころの私はそんなの怖くなかった。
魔法を唱えればどうにかなるって思ってたから。

でも。

魔法を使えない今。

最悪だって思ったんだ。

テロリズム 2

普通のテロなら。

ってか何が「普通」か判らないけど。

例えば無差別だとか爆弾テロだとか。ある程度の要求があつての行動で。

でも電車に乗っ取るテロは初めてだった。

もちろん魔法が使える奴が乗ってることも想定してるから。

テロリストのボスは魔封じの魔法を唱えた。

魔封じは結構高度で。

習得には血を吐くほどの努力が必要で。

それだけを見ても魔法を教えた奴がいるってことで。

私は吐き気がした。

スランプ状態で此処に乗り合わせて何もできない自分にも腹が立たし。

テロリストのボスは私の顔を知ってたみたいで。

「エレノア・エアデールじゃないか。」

そう声をかけてきたんだ。

私はそいつとは面識がなかったから。

ひたすら無視を決め込んでいたら。

もう一発爆発音と共に悲鳴が上がったんだ。

「やめる!!!」

私は堪らずそう言つと。

「それでいいんだよ。エレノア。」

俺の言うこと聞けばいいんだよ。」

そう言つた。

「お前は何が目的なんだ？」

私は堪らずそう聞くと。

ボスは目を細めて。

「金に決まってるじゃん？」

そう言つた。

「ここに乗ってる全員の家族から金巻きあげるのが目的だ。」

命が惜しいならとボスは言った。

「そしてエレノア。」

お前には一緒に来てもらう。

魔法使われるのも厄介だし。」

私はスランプでどうせ魔法も唱えられないと口からついて出そうになつただけど。

辛うじて呑み込んだ。

それ以上に金を巻き上げるのが目的ならテロなんてやらなくていいのと思つて。

私は感情を極力込めないで言つたんだ。

「テロって1番卑怯で弱虫がやることだつて知つててやつてるのか？」

私は拳を握りしめて。

吐き気と戦いながら言ったんだ。

だって私は惨めだった。

魔法すら使えなくて。

人を助けることすらできないだなんて。

「エレノア・エアデールが噂どおりってか。

予想以上に綺麗だったから俺たちも驚いてるんだが。」

ボスはそう言っつて。

私の名前を連呼されればされるほど私が標的だったと他の乗客に思い込ませる集団心理のMRだった。

「乗客をせめておろしてやってくれないか？

私は逃げも隠れもしないから。」

私はボスにそう言った。

震える心と腕に叱咤しながら。

「そうだな。」

ボスはそう言っつて。

「交渉の次第つてどこか？

エレノア・エアデールが俺たちの仲間に入ることが条件だ。」

ニヤリと音がしそくに口を歪めてボスは笑っつ。

「そうじゃなければ……。」

また爆発させるぞ。」

私には完全に選ぶ権利も逃げる権利もなかった。

それは本気。

こいつらは狂ってるから。

私はそれに気づいていたから。

「なら話は簡単だ。

ついて行くから早く電車を降りよう。」

私は早くこの場所から離れないと思ったんだ。

「でも残念。

爆弾あと3個ほど他の列車にも仕掛けたんだ。

まさかエレノア・エアデイルが乗ってるなんて思ってなかったから。」

平気で言うその声と共に。

起爆装置を嘘じゃないと見せるボスは憎たらしくて。

「…頼む。関係ない人を巻き込まないでくれ。」

私は懇願した。

震える手とその心で。

臆病な私は逃げ出したかったけど。

「…それなら俺たちに魔法を使わないって約束できるか？

何があっても。」

ボスは口を歪め笑ったまま。

私にそう言ったんだ。

その時気づいた。

そのボスは遙か昔。

私を襲おうとして私が口封じを使った奴だっただけ。

「…お前。森本か？」

私は聞いたんだ。

テロのボス森本とは初めから相なれなくて。

私が魔法で叩き出してやった初めての生徒だった。

「お前。いつの間に魔封じも使えるようになったんだ？」

私は思わず呟いて。

自分がスランプなのも忘れて。

「はっ！！ばれちゃ仕方がない。

それよりどうするんだ？この起爆装置本物だぞ？

エレノアに依ることにしてやる。」

「森本！！バカなことはやめるんだ。」

私はそう言って。

「…エレノアが俺のものになるって誓うならこの起爆装置警察に渡しても良いけど？」

バカなことを言う森本に腹が立つて。

森本は講習に来た当初から私を襲おうとしてた。

私は身の危険を感じて。

口封じをかけたんだった。

でもそれは永遠には効かないから。

きつと犯罪者にまで堕ちてしまった。

森本が私が乗ってる電車を標的にしたのはきつと偶然で。

だけど私の顔を見て恨みが出てきたんだろって思う。

私は昔から何かしら恨みを買ってるように。

「判った。

お前について行くからそれは警察に渡せ。」

テロリストは森本含め6人。

私がそう言つと。

森本は私の震える腕を取つて。

瞬間移動を唱えたんだ。

瞬間移動で着いた先は。

淋しいところだった。

砂漠の町だった。

「起爆装置を渡せ。」

私は震える声で森本にそう言つと。

森本は私に口づけた。

「っん!!!」

性急なその様子に怖くなって。

「っ!!!森本!!!」

こんな外でお前は変態かっ!!!」

砂漠の町は人通りはなかったけど。

いつ誰が通るか判らないところでしようとする森本の行動は理解が出来なかった。

森本はチツと舌打ちをして。

起爆装置を投げて魔法で爆発させた。

それは高度な起爆魔法だった。

私は呆気にとられて。

「約束が違うだろうが!!!」

そう言っよ。

「アレ。フェイクだから。」
そうにやりと笑って言ったんだ。

FAKE 2

それから。

私は森本に腕をつかまれ近くにあったモーターに連れ込まれたんだ。

「エレノアが外じゃやだつて言うから俺要らない金払ったぞ。

その分まで楽しませてもらうからな。」

オスの表情を浮かべて。

森本は私に襲いかかった。

口づけは性急で。深くて。

息もつけないほどに。

私は。

私は別に夢見てたわけじゃないけど。

操を守ってたのはこんな奴のためにじゃなかったのに。

それだけが後悔として心に重く押し掛かる。

私の抵抗なんて森本には意味をなさなかった。

やすやすと封じて。

服を破り。

好きなように抱いたんだ。

ああ。聖。

私は体までもお前を裏切ってしまった。

もう愛してると言えない。

そう思ってるのに私は感じたんだ。
森本に抱かれて。

…男だから強姦になるのか判らないけど。

「エレノア。すっげえイイじゃん？」

感じてんの？」

背徳の欲望を私は持ってたんだ。
きつとそれがばれるのが怖くて。

必死で操を守ることであづかれないうちに生きてきたんだ。

私は心も体も一糸まとわぬ姿にされて。

ただ一つ。

判ったことは。

聖にもう好きだと言えなくなったことだけだった。

董の香りを聖は好きだと言ってくれた。

私は董の香りが苦手になった。

それはなぜか。

それは私が本当は淫乱でどうしようもないような奴だから。
それがばれるのがすごく恐ろしいことだから。

日下のキスに感じたとき。

私は董の香りを思い出して。

それがスランプの原因となり。

魔法も使えないダメな奴になり下がってしまった。

私は本当に好きだったのに。

FAKE 2 (後書き)

次に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9272h/>

Viola mandshurica

2010年10月14日21時17分発行